

女山・山内古墳群

福岡県山門郡瀬高町女山神籠石内所在古墳群の調査

瀬高町文化財調査報告書

第 2 集

1982

瀬高町教育委員会

女山・山内古墳群

山門郡瀬高町女山神籠石内所在古墳群の調査

1982

瀬高町教育委員会

序

山門はもうまし邪馬^{やままと}台、いにしえの卑弥^{ひみこ}乎が国、水清く、野の広らを、稲^{いね}豊^{ゆた}に酒を醸^{かも}して菜^{さい}は多^{さば}に油^{あぶら}しぼりて、幸^{さいは}ふや濁^{みづ}の貢^{うづ}と、珍^{うづ}の貝^{かい}、ま珠^{たま}。照^ある^{はた}鰭^{はた}。見^みさくるや童^{わらべ}が眉^{まゆ}に、霞^ぞ引く女山^{やま}。清水^{しみず}。朝光^{あさかげ}よ雲^{うみ}居^い立ち^{たち}夕光^{ゆふかげ}よ潮^{うしほ}満^みち満^みつ。げにここは邪馬^{やままと}台の国、不知^{しらぬ}火^ひや筑^{つく}紫^し濁^{がた}、我が郷^{さと}は善^よしや。

——山門の歌——

北原白秋にうたわれている山門とは、今日の山門郡をさしており矢部川流域の瀬高町を中心に、東に霊峰清水山系につながる山麓部と、西に有明海に面する沿岸部にわかれています。

神籠石のある女山は、古来よりいくつかの説話、伝説をもった山であり、今回発掘調査された「山内古墳」は神籠石列石内にある数十の古墳の内の二基であります。この古墳はみかん畑造成中に発見されたもので、県教育庁文化課のご指導の下に昭和56年11月30日より昭和57年1月6日まで調査を行いました。

このたび、調査結果を冊子にまとめることができましたが、今日文化財保護の重要性が叫ばれている折、本報告書が町民ならびに関係者のみなさんの文化財にたいするいっそうのご認識とご理解のための一助として、お役に立てば幸甚に存じます。

当教育委員会では、国、県のご援助のもとに数年にわたり「女山神籠石」周辺の環境整備事業を行ってまいりましたが、今後も文化財の保護と顕彰に一段と努力いたす所存でございますので、各方面のご協力をお願いするしだいです。

昭和57年 3 月 31 日

瀬高町教育委員会

教育長 田 中 敬二郎

例 言

1. この報告書は、神籠石内に所在する古墳群の緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は、昭和56年度の国庫補助を受けて、瀬高町教育委員会が実施し、福岡県教育委員会の援助を得た。
3. 遺物整理の指導は鉄器を九州歴史資料館職員横田義章氏、土器を福岡県教育委員会の岩瀬正信氏に願った。写真撮影は遺構を川述昭人・伊崎俊秋、遺物は平島美代子氏が撮った。遺物の実測は川述、伊崎が行い浜田信也、中間研志の諸兄と平田春美氏の協力を得た。なお付編1の甕棺の実測は荒武麗子氏に願った。遺構、遺物の製図は豊福弥生氏が行い遺物の一部は平田春美氏の協力を得た。
4. 本書の執筆はⅠ、Ⅱ、Ⅲを川述、Ⅳ－1を九州歴史資料館調査課長石松好雄、Ⅳ－2を伊崎、Ⅴ－1・2を川述、Ⅴ－3を伊崎、付編の1を川述が、2を小池史哲が担当した。
5. 本報告書は川述が編集した。

本文目次

	頁
Ⅰ はじめに	1
Ⅱ 位置と環境	2
Ⅲ 古墳群の調査	4
1. 1号墳	4
2. 2号墳	9
Ⅳ 神籠石の調査	22
1. 第2・3次の調査	22
2. 第4次の調査	26
Ⅴ 小 結	29
付編 周辺遺跡の調査	32
1. 堤遺跡出土の甕棺墓	32
2. 榑現塚周辺遺跡出土の縄文時代遺物	37

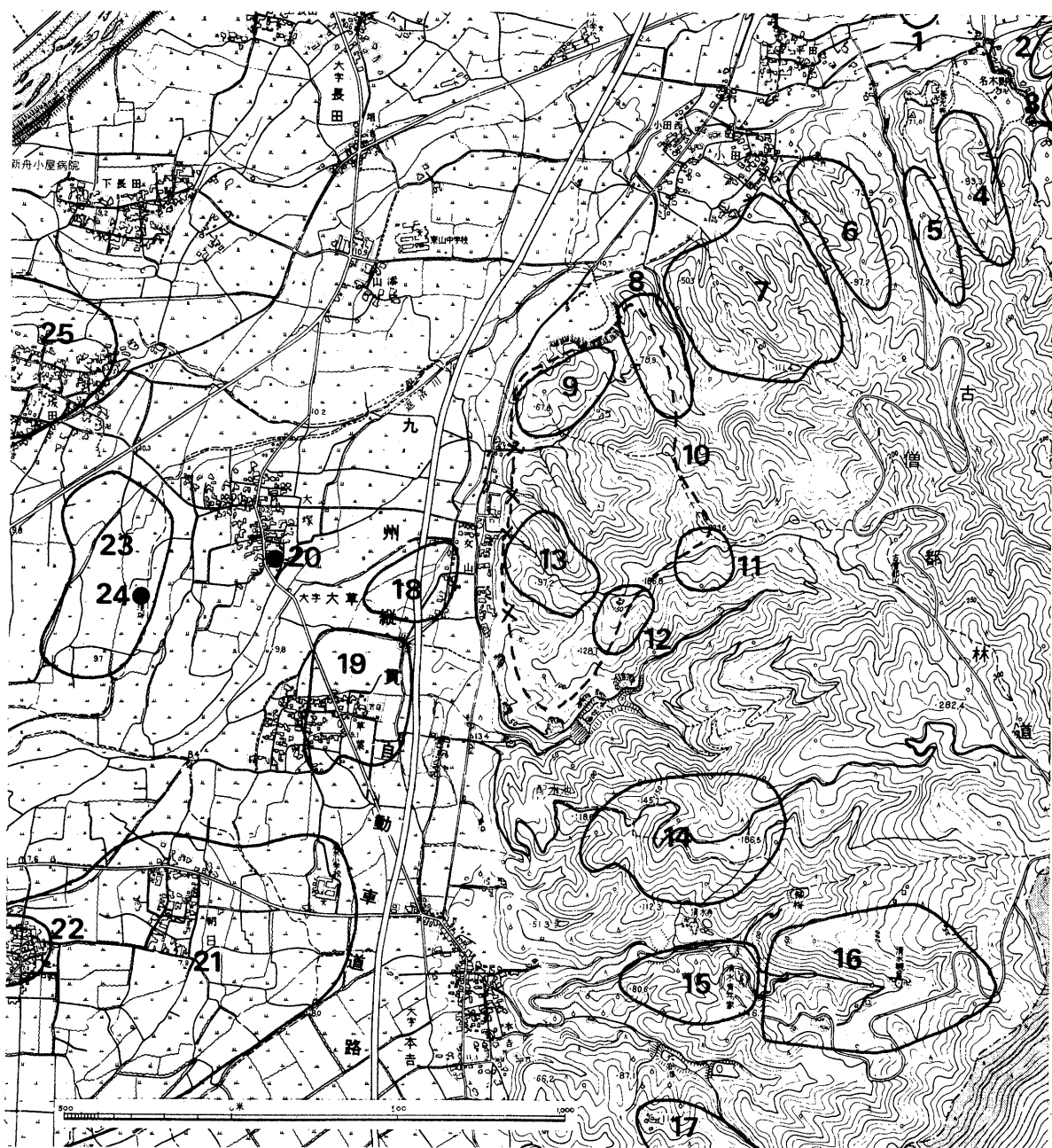
I は じ め に

国指定史跡女山神籠石の列石内に所在する当該古墳群は、旧年来の土取り工事の影響で地すべりを起し、地殻の亀裂が古墳群にせまって危険な状態となっている。このため、事前に古墳群の調査をして記録にとどめ、あわせて、神籠石との関連を明らかにする事を目的として開始された。発掘調査は瀬高町教育委員会が事業主体となり、福岡県教育委員会の援助を得て実施された。調査は昭和56年12月1日から昭和57年1月6日の間で実施した。

調査関係者は下記のとおりである。

調査責任者	瀬高町教育委員会	教 育 長	田 中 敬二郎
	同	社会教育課長	江 崎 勝 義
	同	同 係長	馬 場 国 広
	同	同 主事	猿 渡 一 範
	同	同	日 高 弘 光
調査担当者	福岡県教育庁文化課	主 任 技 師	川 述 昭 人
	同	主 任 技 師	磯 村 幸 男
	同	技 師	伊 崎 俊 秋

このほか、福岡県文化財保護指導委員の久賀愛策氏からは調査の指導・助言を頂いた。権現塚古墳の地形測量に際しては県文化課調査第一係長宮小路賀宏、同主任技師井上裕弘氏の援助を得た。調査は、標高約160mの高所で実施されたが関係各位、ならびに作業員の方々の協力で無事に終了することができた。また、瀬高町郷土史会の方々の御協力を頂いた。ここに記して感謝の意を表します。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)

- | | | | | |
|------------|-----------|-----------|------------|------------|
| 1. 唐尾遺跡 | 2. 名木野古墳群 | 3. 名木野横穴 | 4. 善光寺山古墳群 | 5. 幽霊谷古墳群 |
| 6. 平田古墳群 | 7. 小山田古墳群 | 8. 長田山古墳群 | 9. 日吉坊古墳群 | 10. 女山神籠石 |
| 11. 相撲場古墳群 | 12. 山内古墳群 | 13. 長谷古墳群 | 14. 獅子穴古墳群 | 15. 清水谷古墳群 |
| 16. 清水山古墳群 | 17. 高塚古墳群 | 18. 大道端遺跡 | 19. 草場遺跡 | 20. 蜘蛛塚 |
| 21. 山門遺跡 | 22. 堤古墳群 | 23. 権現塚遺跡 | 24. 権現塚古墳 | 25. 坂田遺跡 |

II 位置と環境

山内古墳群は福岡県山門郡瀬高町大字大草字山内に所在する。

当該古墳群は長谷古墳群とともに国指定史跡女山神籠石の列石内に所在しており、広くは女山古墳群の名で呼ばれる事もある。

瀬高町は福岡県の西南部に位置し、久留米市の南方20km、大牟田市の北方16kmと両市のほぼ中間の距離にある。同町の北方は、有明海にそそぐ矢部川が蛇行しており、東方には標高200～400mの筑肥山地がせまがるが、西方、南方は筑後平野の南半部を形成する肥沃な穀倉地帯が開けている。

当該古墳群はこの筑肥山地の西端部の標高158mの西向斜面に営まれている。筑肥山地の西側山麓斜面には総延長2.9kmの女山神籠石が所在し、当該2号墳の墳裾部近くには列石がせまっているが、この周辺部は土取り工事による影響で神籠石の崩壊が進んでいる。

周辺遺跡については、「大道端遺跡調査報告書」^{註(1)}に詳述されているので参照されたい。ここでは、それ以後の調査結果の概要を紹介しておく。まず、昭和47年に福岡県教育委員会による「大道端遺跡」^{註(1)}の調査が行われた。調査の結果、149軒の竪穴住居跡が検出され、その年代は弥生後期、古墳時代後期から奈良時代前期に及ぶものであり、中でも古墳時代後期が多数を占めていた。この年代は当該墳被葬者と合致し、また、当該墳の麓に所在する集落であるため、両者間の関連性は大きい。ついで、昭和51年に福岡県教育委員会により「名木野古墳群」^{註(2)}の調査が実施された。11基の古墳が調査され、1基は5世紀代の竪穴系横口式石室であり、他の10基は5世紀後半から7世紀初頭までの横穴式石室であった。出土遺物の内容は、200個体をこえる須恵器と100個体に及ぶ土師器、馬具類、さらに11号墳からは珠文鏡2面と銅釧などが検出された。昭和55・56年には、瀬高北部地区圃場整備事業に伴う試掘調査により、権現塚周辺遺跡の遺構の範囲と内容が明らかとなった。即ち、権現塚周辺の微高地には縄文時代晩期から古墳時代に及ぶ集落が所在することが確認された。権現塚古墳は主体部及び年代は不明であるが、直径45m、高さ5.7mの2段築成の円墳であり、幅約11mで、深さ1.2mの周溝を有する県内屈指の円墳（付図1参照）であることが判明した。昭和56年の調査では、後述する堤遺跡の甕棺墓（弥生時代中期）が2基検出され、当町の弥生時代の墓制の一端を知ることができた。

註(1) 「大道端遺跡」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅣ 福岡県教育委員会 1977

(2) 「名木野古墳群」瀬高町文化財調査報告書 第1集 瀬高町教育委員会 1977

Ⅲ 古墳群の調査

1. 1 号 墳

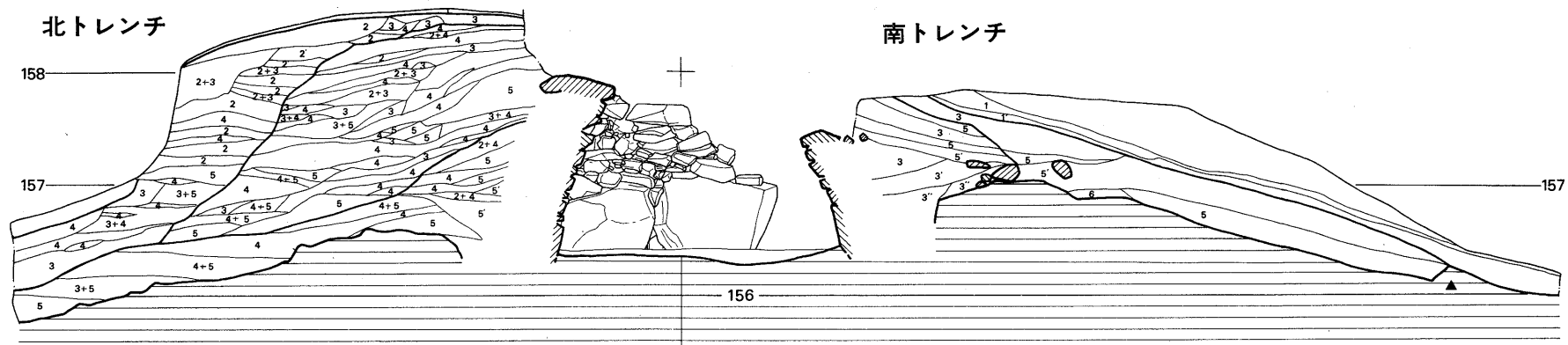
(1) 墳 丘 (第2図、付図2、図版2・3)

古墳は矢部川を望む筑肥山地の西側の山腹に営まれており、墳丘頂部は標高158.5mを測る。伐採後の観察では頂部中央に陥没坑があり、石室内をのぞける状態であった。また、羨道部には、石積と平行に幅約1mのトレンチが入れられており、石室内へは自由に入れる状態であった。地形測量時の所見では墳丘の規模は北側墳裾部はカットされているが見かけ16m程のものと思われた。調査の結果、墳丘は径13.8mを測る円墳であることが判明した。古墳は自然地形を利用して若干の地山整形を行っており、盛土は地山面から開始されている。南トレンチでは、石室中心から6.85mの位置が墳裾であり、墳裾の高さは石室床面と一致する。石室墓壇の掘り方は中心から2.25mの位置にあり、ここより70cm外方には25cm大の石を置き、この部分から内側へ斜め上方に第1次の盛土を行う。この盛土は石室を覆う高さまで石室の構築と並行して行われている。その後、墳丘を形づくる盛土を行う。現存盛土高は75cmと低い。北トレンチは墳丘がカットされているため墳裾は確認されなかったが、盛土は石室中心から5.95mまでみとめられた。掘り方は中心から2.15mの位置にあり、1.95mの盛土がみられる。盛土は大きく3段階にわけて行われている。まず、石室床面から1.25mの高さまでは石室の裏込め的な盛り土を行う。ついで、中心から4.2mまで、石室を覆ってしまう丁寧な盛土を地山から1.85m程行う。最後に墳丘を形づくる水平位の盛土を行っている。東トレンチでは同じく3段階の盛土工程がある。まず、石室中心から3.4mの位置より内側へ、斜め上方へ行き、ついで4.35mの位置より、やや水平位に行い、最後に墳丘を形づくる水平位の盛土を行っている。

(2) 石 室 (第3図、図版4・5)

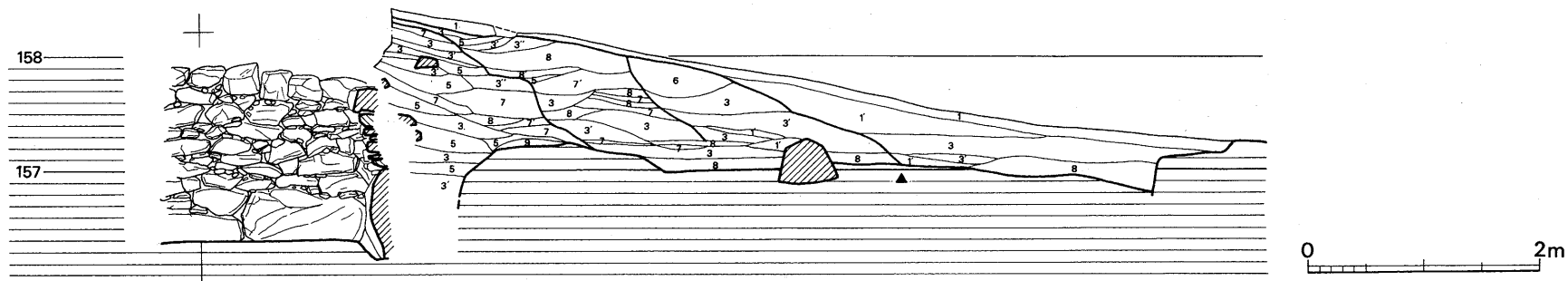
内部主体は主軸をN-118°-Eにとり、西北西に開口する単室の横穴式石室である。石室は全長5.8mを測るもので、奥壁は墳丘の中心になく、墳丘の中心は石室全長のほぼ中央部に位置している。

墓壇は地山を幅4.4mで、深さは25cm~55cm程掘削した浅いものであり、地山が岩盤であるため深く掘削できなかったものと思われる。この墓壇のほぼ中央に石室は構築されている。

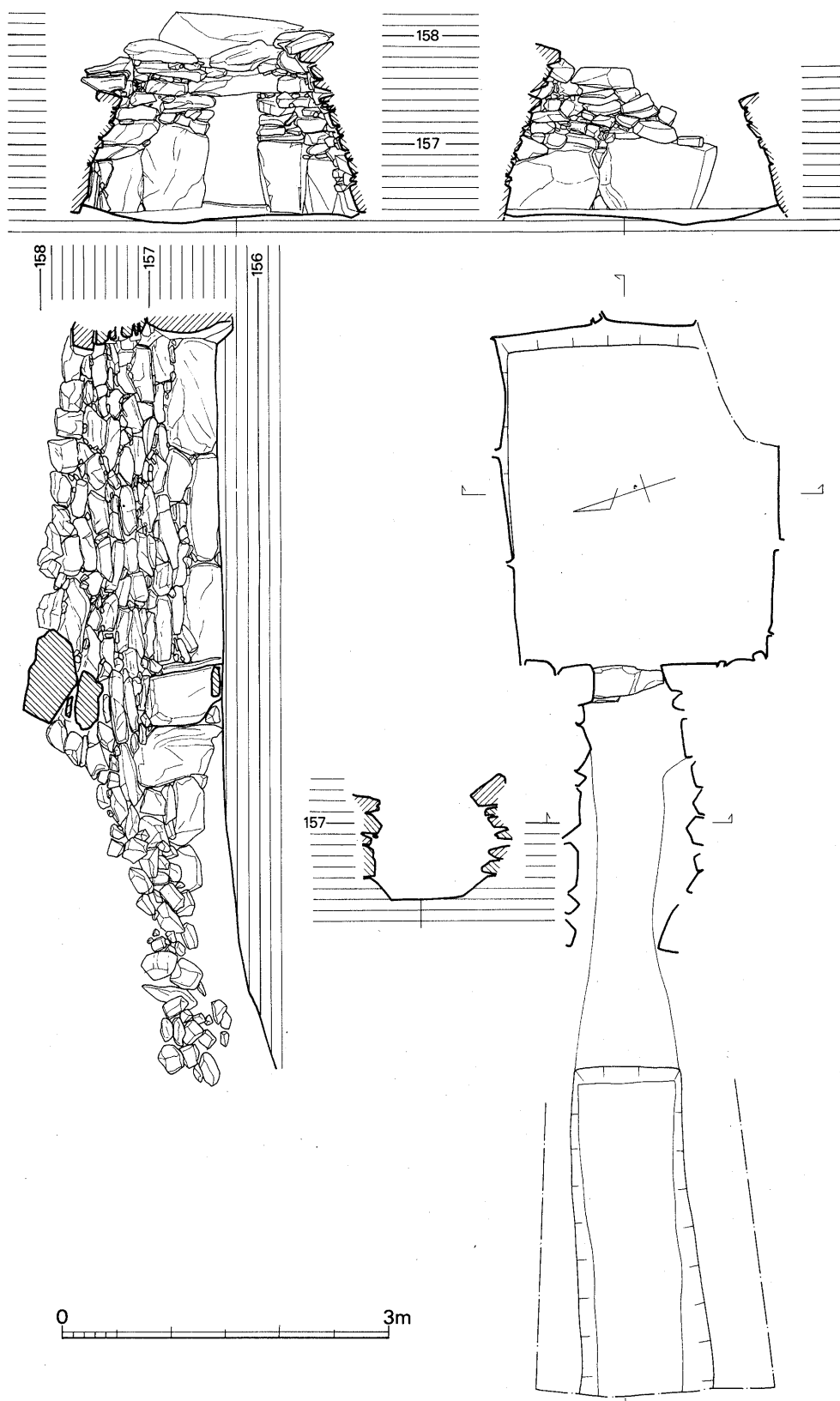


土層名	土層名
1 表	5 淡褐色礫混入土
1' 淡黄褐色砂質土	5' より黒礫土
2 赤褐色土	6 淡赤褐色砂土
2' や灰色がかる土	7 茶黒明礫
3 黄褐色礫混入土	7' より明礫
3' より黒い土	8 褐色明礫
3'' や明色土	8' より明色土
4 茶褐色土	9 灰

南トレンチ



第2図 1号墳墳丘土層図(1/60)



第3图 1号填石室实测图 (1/60)

石室は主軸長3.15m、主軸幅2.55mを測る長方形プランを呈するもので、右側壁の奥壁側は最近、新に積み直している。奥壁は腰石として長さ80～90cm、高さ60cm程の石材を3個用い、上方65cmの間は小き目の石材を6段積みする。石材間の間隙には小石を目詰めするが積み方は粗雑である。壁面は腰石上部からは若干持ち送って内傾させている。左側壁は長さ85～100cm、高さ30～45cmの石材3個を横長く用いて腰石とし、上方には長さ30～45cm程の横長に用いた石材を7～10段積んでいる。両側壁とも腰石部分から壁面を内傾させている。左側壁は床面から高さ1.7m、右側壁は1mを現存する。玄室床面は敷石は所在しない。奥壁と左側壁の奥壁寄りには石材を据えるための掘り込みが溝状にみられる。

袖石は左側壁から68cm、右側壁から1m程突出させており、左・右各2個からなる。袖石は幅50cm、高さ70cmのものを用いており、上方は3段の石積があり、楯石との空間部には目詰め石を用いる。床面からの高さは1.15mであり、袖石間の床面には、厚さ8cmの仕切石を置く。

羨道部の左側壁は長さ2.25m、右側壁は胴張りを呈し、長さ2.4mほど構築されており、羨道中央部はやや脹んで1.05mを測る。羨道部はあらかじめ地山（岩盤の）を深さ20cm程凹状に削掘し、その肩部に基底を置き、高さ75cm～90cm程積んでるのがみられる。

墓道は羨道部に続いて1.2m程は乱雑な貼石状の石積みをもった地山削掘によるもので、羨道端部から1.1m前方には深さ20cm程の段落ちを墓道につけており、この位置は、墓道の石積みの終息位置とほぼ一致する。墓道の下幅は、墓道中央部で80cmを測り、長さ4m程確認された。底面は前方へ下降しており、1mの比高差をもつ。

(3) 遺 物

1号墳の石室は既に開口しており、さらに数年前には郷土史会による石室清掃が実施されたため、遺物の出土は皆無に近い状態であったが、墓道からは初葬時、追葬時の遺物を検出することができた。

1. 鉄 器（第4図、図版10）

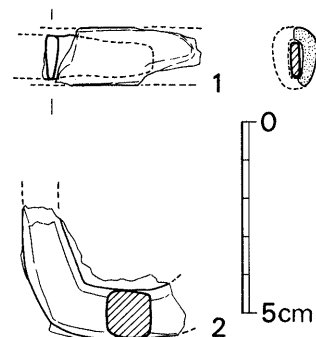
玄室攪乱土中から鉄器が2点検出された。

刀子（1）

鹿角装刀子である。柄部分のみしか遺存していない。現存茎長は2.9cm、茎幅1.1cm。鹿角柄部は3.9cmほど遺存しており、幅1.6cm、厚さ1.2cmである。

不明鉄器（2）

小片であり詳しくは不明である。現存部はやや角張るが環状を呈している。断面形は一辺1.1～1.2cmの方形を呈する。



第4図 1号墳出土鉄器実測図
(1/2)

2. 土 器（第5図、図版11）

いずれも墓道からの出土品である。須恵器は蓋杯・壺・甕を、土師器は高杯を検出した。

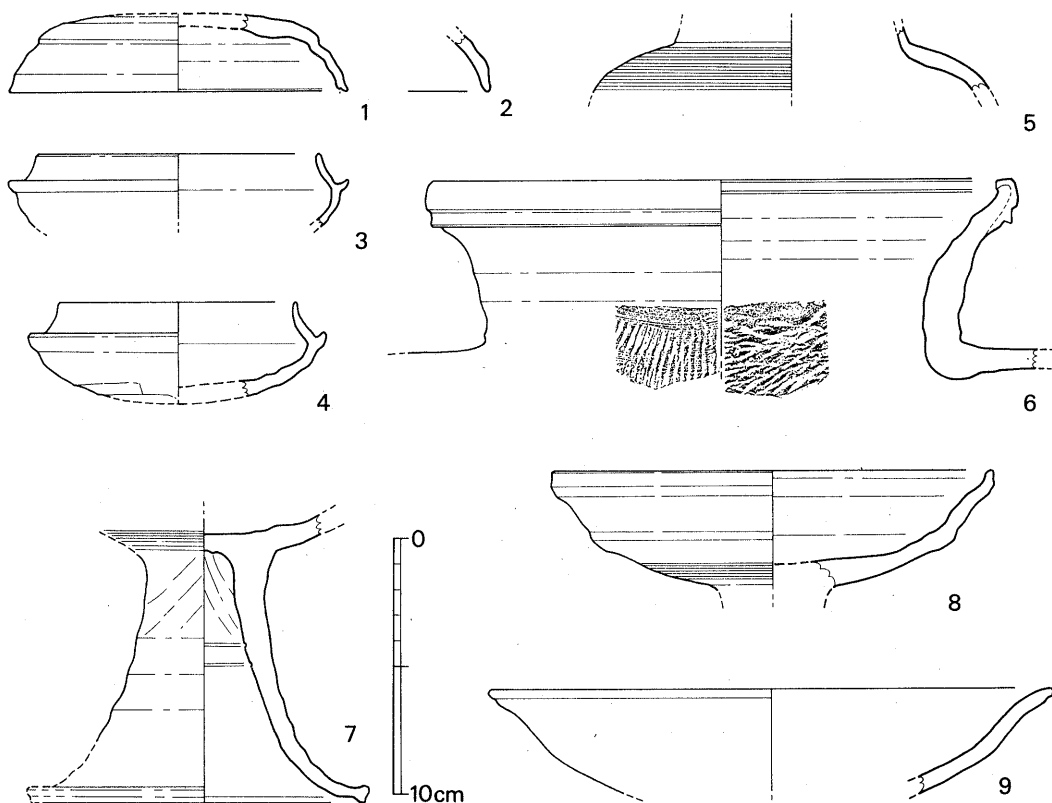
須恵器（1～6）

杯蓋（1・2）

1は口縁端部内面に甘い沈線が入って段をなし、外面の天井部と体部の境には凹線が入る。天井部外面はへう削りを施しており、平坦面をなす。この部分の内面は布等を使用したと思われる一定方向のナデを、以外の部分は横ナデを施す。胎土には多量の細砂粒を含む。焼成は良好であり、暗灰色を呈する。天井部外面は自然釉の付着が著しい。口径13.4cm、器高3.1cmを測る。2の口縁端部は丸くつくられており、外面の段も入らない。横ナデ調整を施す。胎土には大粒の砂粒を含んでいる。焼成良好であり、灰色を呈する。1とは時期差があり追葬時の所産と思われる。

杯身（3・4）

3の立ち上りは1.1cmとやや長く、内傾する。一様に薄手造りである。現存する内外面とも横ナデ調整を施す。胎土に細砂粒を含み、焼成は良好で明灰色を呈する。口径11.2cm、蓋受け



第5図 1号墳出土土器実測図（1/3）

口径13.4cmを測る。4は3に比して小ぶりである。立ち上りは1.4cmと長く、基部付近は内傾するが、端部近くは直立する。底部外面は狭い範囲に手持ちへう削りを施し、他の部分は横ナデ調整である。胎土は精選されていて良好である。焼成は良好であり、明灰色を呈する。口径9.4cm、蓋受け部径11.8cm、器高4cmを測る。

壺 (5)

短頸壺であり、脚が付く可能性もある。胴部外面はカキ目調整し、他の部分は横ナデ調整を施す。頸部から頸部直下の胴部にのみ自然釉の付着がみられないため、蓋をかぶせて焼成した事が考えられる。胎土には微砂粒を含んでいる。焼成は良好であり、暗灰色を呈する。

甕 (6)

墳丘上からの採集品である。頸部中ほどから口縁部にかけて外反度が強い。口縁部下面には凸帯を有し、内面は屈曲面を有する。頸部外面は平行叩き上を横ナデし、内面は横ナデを施すが、凹凸が著しく器表に残る。胴部外面は平行叩き上をカキ目調整し、内面は弧状叩きを施す。胎土には大粒の砂粒を多量に含む。焼成は良好であり、明灰色を呈する。口径23cmを測る。

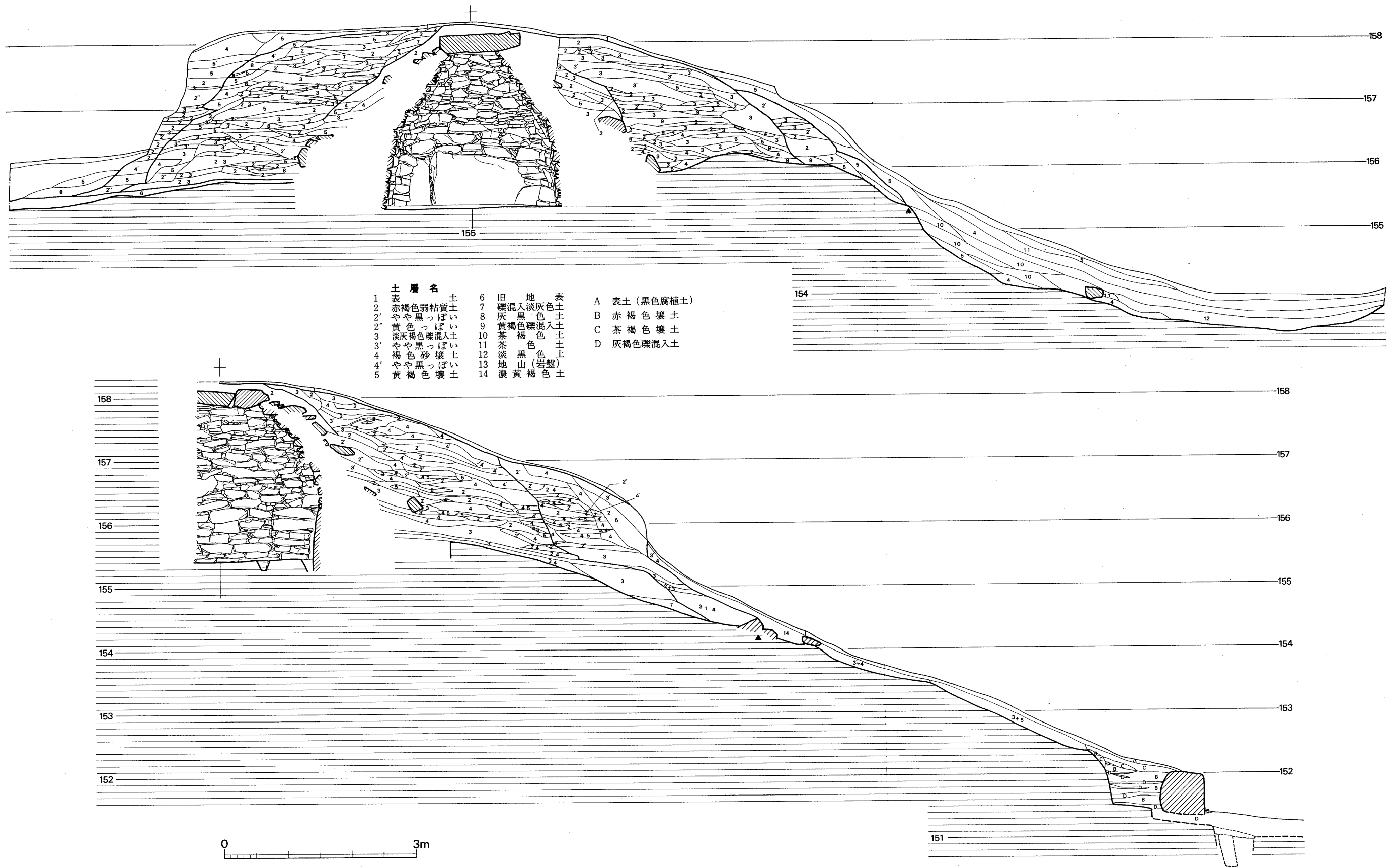
土師器 (第5図7～9)

高杯 (7～9)

7は脚柱上部の内外面にしぼり痕が見られ、杯部外面はカキ目調整する。内外面とも横ナデ調整である。胎土には多量の小砂粒を含む。焼成は良好であり、明褐色を呈する。須恵器的な土師器である。8は杯部のみであり、体部中ほどに若干の段を有し、口縁部を短く直立させる。杯部底外面にはカキ目を施しており、7とは別個体であるが、形態的には8の杯部に7の脚部がつくものと思われる。胎土には砂粒をほとんど含まず精良であり、雲母を含む。焼成は良好であり、明茶色を呈する。口径17.4cmを測る。9は杯部が大きく外反する形態の高杯であり、口縁端部直下に沈線が入る。内外面ともへう研磨調整し、内外面ともに丹塗りである。胎土には細砂粒を多量に含む。焼成は良好であり、胎土は黄褐色を呈する。口径22.3cmを測る。

出土土師器は第ⅢB様式に属するものがほとんどであるが、2の蓋杯のみ第Ⅳ様式に属するものと思われる。第ⅢB様式は6世紀後半に比定され、第Ⅳ様式は6世紀末に比定される。

註(1) 小田富士雄 「塚ノ谷古窯跡群」八女古窯跡群調査報告Ⅰ 八女市教育委員会 1969



第6図 2号墳墳丘土層図 (1/60)

2. 2 号 墳

(1) 墳 丘 (第6図、付図2、図版2・6)

古墳は1号墳の東方19.5mの近距離に営まれており、墳頂部の標高は158.3mであり、1号墳とはほぼ同じ高さに所在する。墳頂部はやや平坦になっており、北西方向には盗掘坑があつて、石室はすでに開口していた。同該墳の南6.5mの位置には北東方向に連なる神籠石の列石が築造されており、古墳はこの列石内に所在するのである。地形測量時の所見では墳丘の規模は見かけ17m程のものと思われた。調査の結果、墳丘は径13.85mを測る円墳であることが判明した。1号墳の径は13.8mであり、両墳は全く同規模であるため、企画性をもって築造されたことがうかがえる。

古墳の築造に際しては地山整形を行い、地山を基底面とし盛土を行う。南トレンチでは石室中心から8.35mの位置に墳裾を定めており、内側から順次外側へ3段階の盛土を行っている。まず石室構築と平行して、斜め上方への盛土を、中心から5.55mの位置まで行う。石室床面から2.05mの高さまでこの作業を行い、ついで石室の石材をすべて覆うだけの一層の盛土を行う。最後に墳丘を形づくる水平位の盛土を行うが、非常に細かな単位の丁寧な版築である。盛土は赤色土と灰色粘質土を基調として交互に行っている。墳裾の南6.5mの距離で、墳裾より3m程低い位置に神籠石の基底面が置かれている。当初、当該トレンチの調査で、古墳と神籠石との関連が判明しないかと期待したが、前後関係はつかめなかった。なお、神籠石裏込めの版築については後述する。石室の掘り方は石室中心から3.6mの位置にあるが、浅い掘り込みである。西トレンチでは石室の中心から6.8mの位置に墳裾を定めており、その基底面の高さは石室の床面(地山面)と一致する。盛土は大きく3段階の工程がある。まず、石室の構築と並行して(高さ1.3mまで)石室中心から5.2mの位置まで行き、つぎに、天井石まで及ぶ最小限の盛土を斜め上方へ行う。最後に墳丘を形づくる水平位の盛土を行う。盛土の厚さは2.1mを測る。東トレンチでは旧地表はほぼ水平位であり、盛土は旧地表から開始される。まず、石室全体を覆う裏込めの盛土をし、ついで、上・下幅2.5mの範囲で墳頂まで水平位の綿密な盛土を行う。石室中心から5.1mの位置である。最後に墳丘を形づくる水平位の盛土を行う。

盛土は前述の如く、赤色土と灰色粘質土を基調にした小単位の盛土を非常に丁寧に行っている。

(2) 石 室 (第7図、図版7～9)

内部主体は主軸をN-122°-Eにとり、西北西に開口する複室の横穴式石室である。石室の平面形は、胴張り形態を呈するものであり、全長は5.95mを測り、奥壁の中心が墳丘の中心となるものである。

墓壇の掘削は墳丘東側の平坦部では旧地表面から開始されるが、他の斜面部分では地山を整形し、深さ30～50cm程の浅い壇を穿っている。1号墳と同様に墓壇は浅いものであるが、これも地山面が一部軟質ではあるが大半が岩盤のため、深く掘削できなかったためと考えられる。石室の左・右壁側では墓壇の肩部は検出しえなかったが、奥壁側では、この位置から2.1mの位置に所在しており、奥壁背後の空間が広い。

後室は袖石間を結んだ主軸長2.78m、奥壁幅2.05m、中央部幅2.7m、前壁部幅1.4mを測り、各石材が片岩の割石ということもあり平面形はきれいな胴張りを呈する。奥壁は中央部に長さ1.25m、高さ80cm（床面からの高さ）の大石を鏡石として用いており、その左・右は長さ35cm～40cmの石材を腰石として使用している。腰石上面には5段積みで70cmを測る小さめの石材をほぼ垂直に平積みし、さらに上方は10段程40度の角度で著しく持ち送式に平積みしている。天井には長軸に対して直角方向に2枚の天井石を架構している。天井空間部の幅は60cm、長さは1.05mと狭いものであり、それだけ壁面の持ち送りが強いことを示す。側壁の左は8個、右は9個程丈の低い片岩の割石を基底面に置いている。左側壁は約20段に近い石積みで床面からの高さは2.5mを測るが、床面から1.55mまではゆるやかな持ち送りを、上面は33度程の強い持ち送りを行って壁面を構築する。前壁は45度の持ち送りを行い、内傾度が著しい。床面では奥壁と平行に、奥壁から65cmの位置には、上面幅20cm、底面幅6cmで深さ15cmの溝状の掘り込みがみられ、屍床を形成したものである。

袖石は左側壁から35cm、右側壁から30cm程、各々1個の石材を突出させている。袖石は長さ45cm、床面からの高さ80cmのものであり、この上にはさらに3段積みして、楣石を架構している。

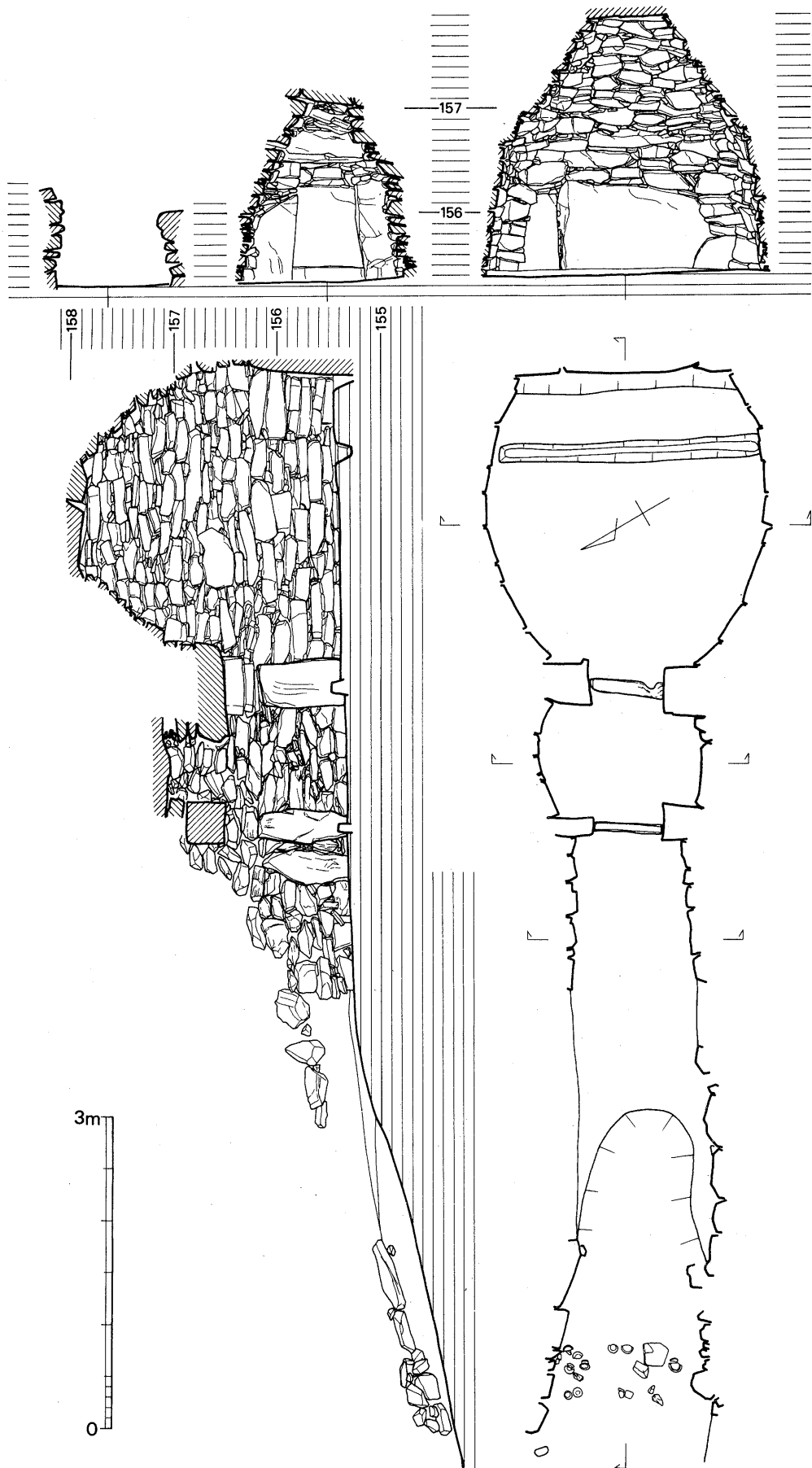
前室は胴張りの平面形を呈しており、左側壁は4個、右側壁は3個を基底面に置く。規模は左側壁長1.1m、右側壁長0.87m、中央部幅1.57mを測る。左側壁は15段程の平積みを行い、天井石までの高さは1.7mを測る。左側壁は、2段目から持ち送りが始まっており、21度の角度をもつ。右側壁は床面から1m程はほぼ垂直壁を構成するが、上面は60度の角度をもち内傾度が強い。天井の幅は35cm、長さ45cmと空間は狭い面積となり、1石を架構する。

仕切石は後、前室とも袖石のほぼ中央部に置かれ、後・前室とも厚さ10cmの柱状のものである。

前室の袖石は、左側壁から34cm、右側壁から30cm程各々1個の柱状の石材を突出させている。袖石の上にはさらに2段積みして、楣石を架構する。

羨道は左側壁1.47m、右側壁1.35mを測り、前室左袖石に接した石材は、この袖石とほぼ同じ規模の柱状の石材を用いている。羨道は中央部幅1.1mで、直線的にのび、床面から1m強程垂直積みの石積みが確認された。

墓道は地山を開削して造られており、主軸とほぼ同一方向に長さ4.5mまで確認できた。羨



第7图 2号墳石室実測图 (1/60)

道部寄りの墓道幅1.2m、先端部の幅1.55mを測り、墓道前面部の底面は下降する。墓道の両壁には1段の石を底面近くに並らべているが、羨道とは言えず石積みをもつ墓道と言えよう。墓道前面の端部近くからは追葬時の土器が多数検出された。

(3) 遺物

2号墳の石室は既に開口していたが前室には土砂が20cm～30cm程堆積していたため遺物の出土については期待がもたれた。玄室内からは古墳築造時もしくは追葬時のものと思われる遺物は盗掘のため遺存しておらず、中世の遺物（土師器杯、瓦器碗等）のみ出土した。前室からは土器では中世の土師器杯が出土したのみである。武器では鉄鏃、馬具では雲珠、辻金具、杏葉、轡、鉸具等が床面近くの攪乱土から出土した。また、装身具では耳環が1個検出された。墓道からはかなりまとまって多数の須恵器・土師器が検出された。なお、墳丘西トレンチの堆積層中からは杯蓋が1個体検出されている。

1. 武器・工具・馬具・装身具（第8・9図、図版10）

鉄鏃（1～23）

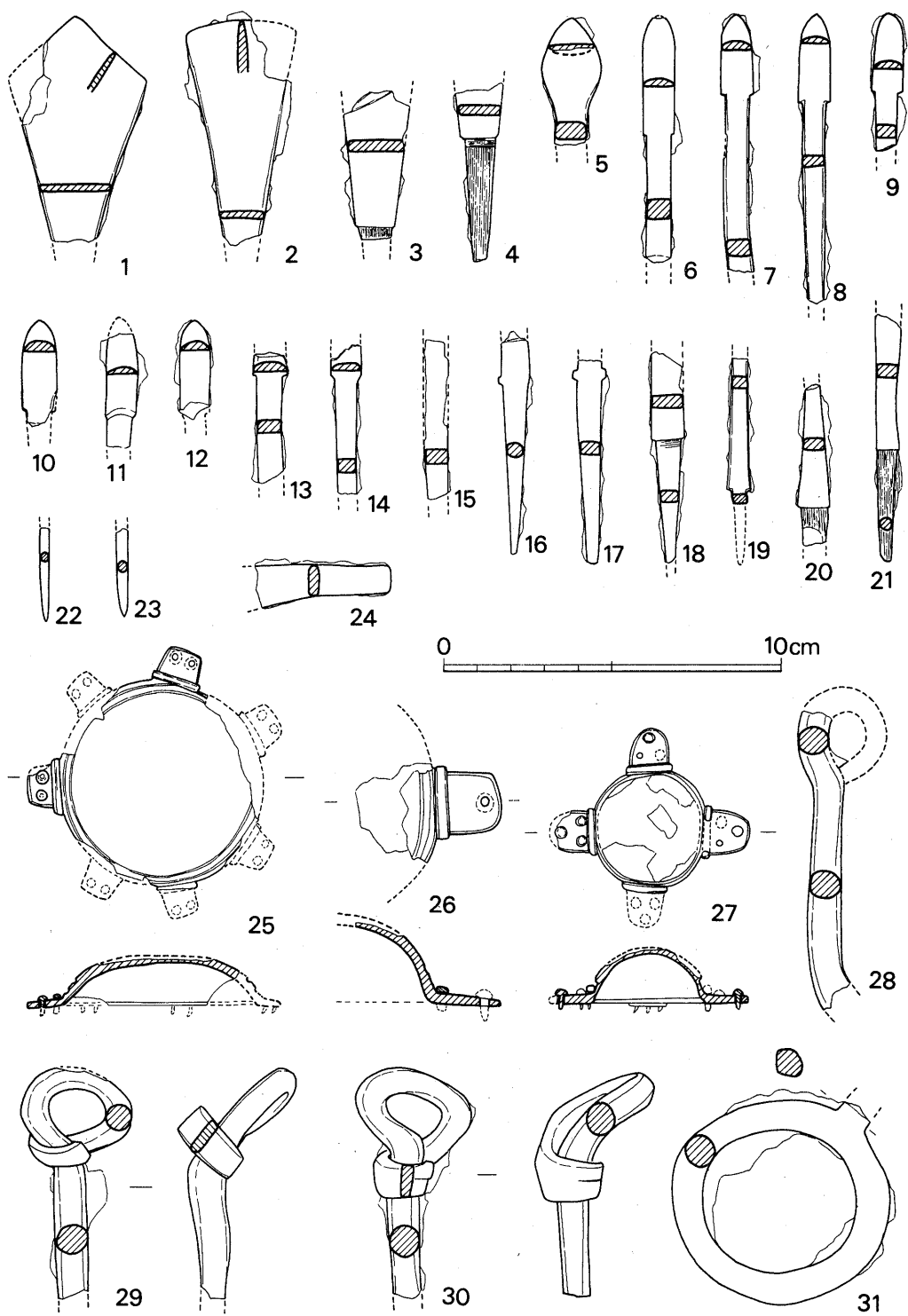
鋒を遺存しているのは14本である。出土した位置は前室からの掻き出しもしくは盗掘の攪乱によると思われる墓道出土品は1・5であり、墓道出土品と同じ意味をもつと思われる墳丘前面からの出土品は2・7・19であり、以外はすべて前室からの出土品である。鋒の形態は4種類に分類される。1は圭頭広根斧箭式であり、茎を欠損する。現存長6.7cm、最大幅4.1cm、厚さ0.2cmである。^{註(1)}2は方頭広根斧箭式であり、茎を欠損する。現存長6.5cm、最大幅3.3cm、厚さ0.2cmである。3・4は鋒と茎の一部であり、1・2・の如き形態のものであろう。5は片丸造鑿箭式であり、鋒長2.8cm、幅1.75cmで、鋒中央部が最大幅となる。6～14は5と同じく片丸造鑿箭式に属するが、細身である。鋒長は2.3cm～3.4cmと一定ではなく、幅0.9cm～1cm、厚さ0.2cm～0.3cmである。身の断面形は長方形を呈する。身と茎との境に突出を有する棘篋被と、突出のない篋被とがある。茎の8は長さ5cmで、断面形は円形を呈するが、長方形のものもある。

刀子（24）

茎部分の小片であり、全容は不明。現存長4cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmを測る。

雲珠（25・26）

25は前室攪乱土中から出土した円形の小型品であり、足金具は現存2個であるが、本来は7個の台形状を呈する足金具がつくものである。鋳留は各2個ずつであり、責金具を有する。直径5.9cm、最大径約7.7cm、高さ1.4cmを測り鉄地金銅張りと思われるが、金箔は遺存しない。26は大形品であり、隅丸を呈する1個の足金具しか遺存しない。責金具を有しており、鋳留は1個である。伏鉢、責金具、足金具はいずれも金銅張りである。前室攪乱土中からの出土品で



第8图 2号墳出土武器・工具・馬具実測図(1/2)

ある。

辻金具 (27)

前室攪乱土中から出土した小形品であり、隅丸を呈する4個の足金具がつき、おのおの鉾留3個で打ちぬかれている。責金具がつくが、革製品は遺存していない。伏鉢下面部は1段を有する。鉾留以外はどれも金銅張りである。径3.5cm、最大径5.9cm、高さ1.7cmを測る。

銜 (28)

現存長8.8cm、径0.9cmの鉄棒しか遺存しない。環状部分を除く、直線部分の距離が短いため、引手とせずに銜と考える。

引手金具 (29・30)

径0.9cmの鉄棒の一端を曲げて円環をつくり、さらに先端を棒状部に一卷きして引手としたもので、最大径3.3cm～3.4cmを測る。同じ形態のため、1セットと思われる。前室攪乱土中からの出土品である。

鏡板 (31・32)

31は、鉄製素環鏡板であり、立聞をわずかに遺存するが、直立していない。長径6.5cm、短径6cm、断面径0.8～0.9cmを測る。32は円環部分の小片である。

鉸具 (33～36)

33は、断面0.6～0.7cmで隅丸方形を呈する鉄棒を曲げてつくられている。長さ8.6cmを測る。前室攪乱土中からの出土品である。34は断面0.8～0.9cmの方形の鉄棒を曲げてつくられている。35は刺金部分であり、一端を曲げて本体を挟み込み可動式としている。刺金長6.9cmで、断面は0.9cmの方形を呈する。36は小形品であり、現存長5.8cm、断面は0.8cmの円形のものである。

杏葉 (37・38)

前室攪乱土中から出土した。鉄地金銅張りであり、鉄板の台板に縁どりの金銅製品を鉾留めしている。鉾の間隔は密に打ちつけられている。内面をうめる金具は検出されていない。下面近くで外縁は内弯する。38は鉾間隔がせまく別個体かとも思われる。40は杏葉を垂下する立聞に接合させる金具であろうか。

留金具 (41・42)

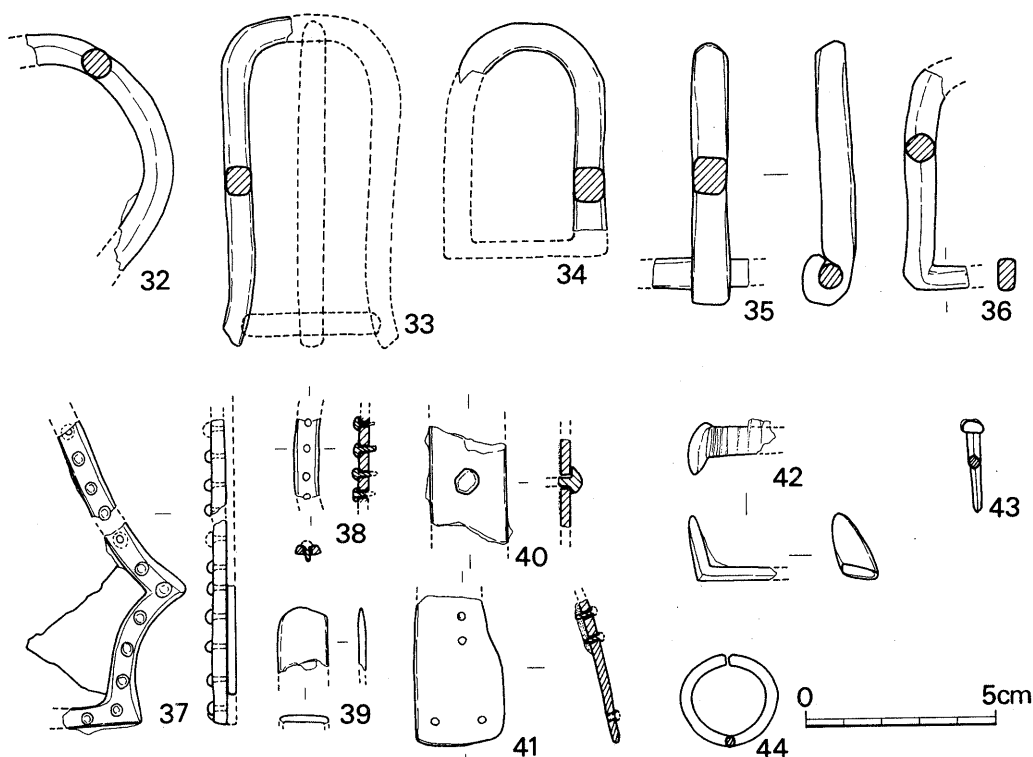
41の内面には横方向の木目が遺存している。42はく形を呈するものであり、く字の内面に板目が遺存しており、板材の接合部分に使用されたものと思われる。

釘 (43)

鉾留の金具であり、全長2.4cmで、断面は方形を呈し、稜がつく。

耳環 (44)

前室出土の銀環であり、遺存状態は極めて良好である。径2.4～2.55cmで円形を呈し、断面は径0.25cmで円形を呈する。



第9図 2号墳出土馬具・装身具実測図(1/2)

2. 土器(第10・11図、図版11~13)

須恵器(10~37)

蓋杯(10~21、23~32)

I a類 (23)

杯身のみである。立ち上りは1.3cmと長く、内傾する。一様に薄手造りである。底部外面はへら削りを施しており、砂粒の移動方向は右廻りである。墓道出土品であり、底部外面にV印のへら記号を有する。

I b類 (24)

杯身のみである。立ち上りは1cmで内傾し端部はややとがり気味である。墓道出土品である。

II a類(10~14)

杯蓋の口縁端部は平坦面を有しており、断面は三角形状を呈する。10は天井部外面にへら削りを施しており、砂粒の移動方向は左廻りである。12・14の天井部外面は未調整である。3個体とも天井部外面にㄣ印のへら記号を有する。

杯身の立ち上りは0.8cmと短く、基部近くは内傾するが中ほどからは直立する。11は底部外面にへら削りを施しており、砂粒の移動方向は左廻りである。13の底部外面は未調整である。

11・13ともに底部外面に乙印のへら記号を有する。

杯蓋10と杯身11、杯蓋12と杯身13はセットであり、いずれも墓道からの出土品である。

IIb類 (15~17、25~29)

杯蓋の口縁端部は丸くつくられており、口径、器高ともに小さくなる。天井部外面はいずれもへら削りを施しており、砂粒の移動方向は右廻りである。

杯身の立ち上りは0.5cm~0.7cmと短く、若干内傾する。基部が太くて断面三角形状を呈するものと、やや細身のものとがある。底部外面はいずれもへら削りを施しており、砂粒の移動方向は29のみ左廻りであるが、他はいずれも右廻りである。杯蓋、杯身とも墓道からの出土品である。

III類 (18~20)

杯蓋には身受けのかえりを有するものであり、身受けかえりは短く、若干内傾する。天井部外面はへら削りを施しており、砂粒の移動方向は18は左、20は右廻りである。

杯身には立ち上りをもたない形態のものであり、底部はへら削り調整で丸味をもつ。砂粒の移動方向は左廻りである。

杯蓋18と杯身19はセットである。いずれも墓道からの出土品である。

IV類 (30~32)

杯身のみであり、いずれも身に蓋受けをもたない形態のものである。体部はゆるやかに外反し、口縁端部は丸味をもつ。底部外面は未調整であり、平坦面を有する。墓道出土品である。

V類 (21)

西トレンチからの出土品である。身受けのかえりは短く、直立する。頂部外面はへら削りを施しており、つまみがつくものと思われる。

Ⅲ (22・33)

22はⅢ蓋と思われる。天井部外面はへら削りを施すが、頂部のみ平坦のためか未調整である。33は通有のⅢの口頸部が直立もしくは内傾し、端部を丸くつくるのに比して異なっている。

Ⅳ (34)

口頸部は口縁端部まで直線的に外反しており、口縁部はわずかに屈曲する程度である。底部外面は手持ちへら削りを施している。

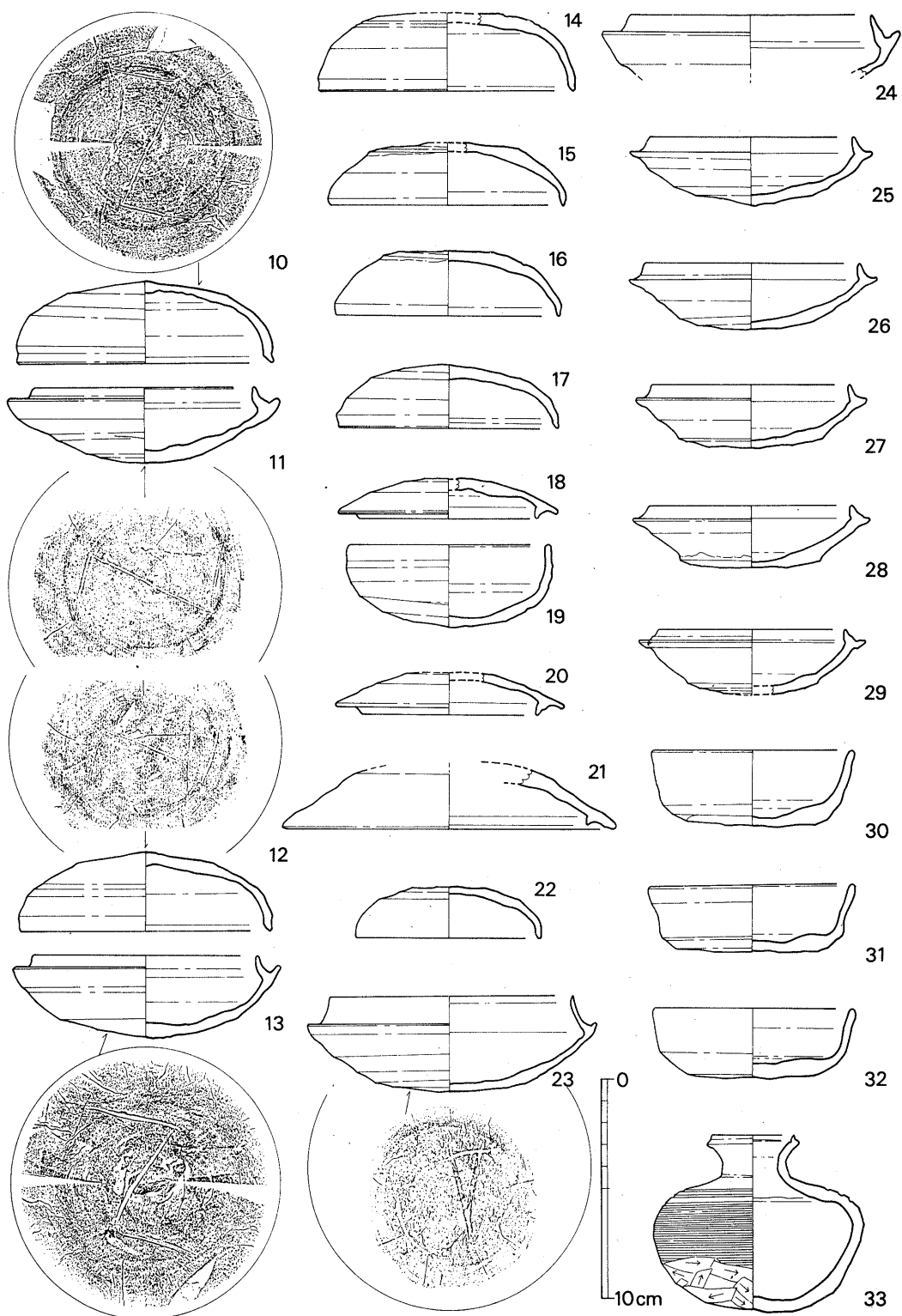
高杯 (35)

脚部を欠損する口径の大きい無蓋高杯である。体部には5条の平行沈線を配する。

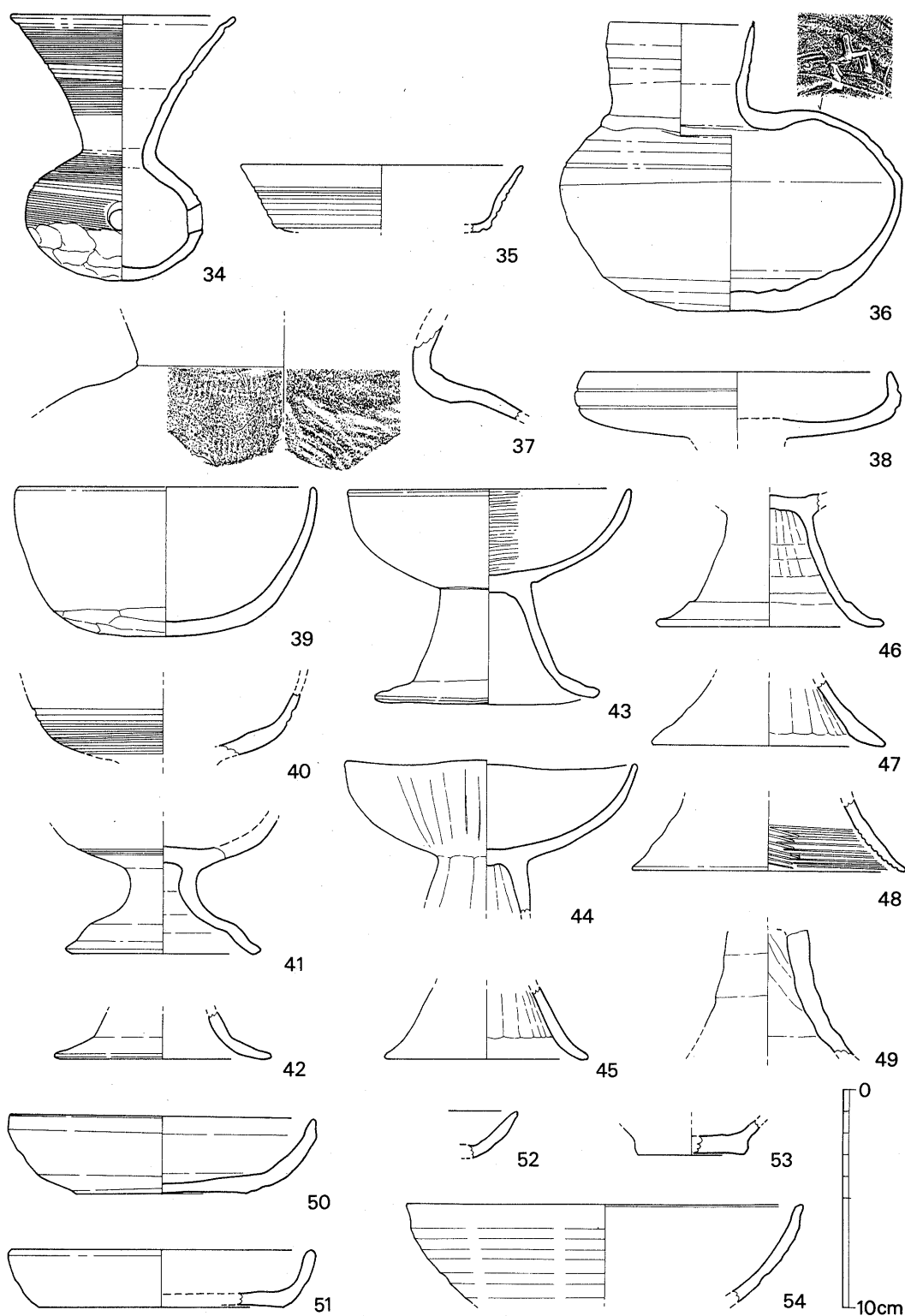
平瓶 (36)

やや外反気味の口頸部を有する。胴部の中ほどに若干の稜線が入る。底部外面はへら削りを施しており、内面下半部は横ナデの際の凹凸が著しい。頸部外面に乙印のへら記号を有する。

甕 (37)



第10图 2号墳出土土器実測図(1/3)



第11图 2号墳出土土器実測図(1/3)

頸部外面は平行叩き上を横ナデ、胴部外面は平行叩き、内面は弧状叩きを施す。軟質、焼成不良品である。

土師器

椀 (39～41)

39の底部外面は手持ちへら削りを施しており、体部は深い、40は杯部の小片であり、2条の平行沈線を施しており、底部はカキ目調整する。脚がつくと思われ、台付椀であろう。41は屈曲する脚部の形態等から台付椀と思われる。

高杯 (38・42～49)

杯部及び脚部の形態から3種類に大別できる。A類は38である、口径が大で、器高の低い杯部をもつ。B類は43～48であり、脚部の形態は細部において若干異なる。45・47・48は外面丹塗りであり、46はうるし塗りである。C類は49であり、脚柱内面にしぼり痕がみられる。

杯 (50～53)

50・52は玄室、51は前室出土品である。いずれも糸切り底の底部である。

瓦器椀 (54)

玄室出土品である。体部外面は口縁部直下まで広範囲にへら削りし、内面は研魔している。

蓋杯を5分類したが、Ⅰ類は立ち上りが長く内傾しており第ⅢB様式に比定される。Ⅱ類は口径の大小によりa・bに細分した。^{註(1)}a類はへら削りと未調整があり同一のへら記号を有する。b類は小形品であり、へら削りを施している。へら削りの際生じた砂粒の移動方向はすべて右廻りであり、a類とは異なった回転方向である。Ⅱ類は第Ⅳ様式に比定されるがa類の方が古い。Ⅲ類は杯に身受けのかえりがつき、身は蓋受けをもたないものである。へら削りを施しており、砂粒の移動方向は、左廻りである。第Ⅳ様式に比定されるがⅣ類よりは古式である。Ⅳ類は身に蓋受けのかえりをもたないものであり、底部は平坦で未調整である。第Ⅳ様式の新しい方に比定される。Ⅴ類は出土位置等から当該古墳との関連性は薄く、他の遺構、例えば神籠石との関連性を重要視した方がよさそうである。第Ⅵ様式に比定されよう。埴、甕はともに底部外面は手持ちへら削りであり、形態から第Ⅳ様式に属する。高杯は第ⅢB様式、平瓶は第Ⅳ様式に属する。土師器は大部分が第Ⅳ様式に属すると思われる。なお、玄室出土の瓦器は12世紀前半代に比定され、玄室・前室出土の土師器は12世紀中頃の年代を考えてよからう。^{註(2)}

第ⅢB様式は6世紀後半、第Ⅳ様式は6世紀末、第Ⅵ様式の杯蓋は7世紀後半に比定される。このことから、当該墳築造の時期は6世紀後半に比定され、6世紀末まで追葬が行われている。その後、約500年を経て、当該石室を再利用した埋葬が行われた可能性がある。

註(1) 小田富士雄他「塚ノ谷窯跡群」 八女古窯跡群調査報告Ⅰ 八女市教育委員会 1969

(2) 九州歴史資料館 森田勉氏の御教示による。

土器観察表(1)

遺物 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)	へら記号	調整法及び特徴	砂粒の 移動方向
10	須恵器 杯 蓋	墓 道	口 径 11.6 器 高 3.7	ㄣ	天井部外面へら削り。他は横ナデ調整。胎土は砂粒を多量に含む。焼成良好で、青灰色。11とセット	左廻り
11	須恵器 杯 身	"	口 径 10 立上り 0.7 器 高 3.4	ㄣ	底部外面へら削り。他は横ナデ調整。胎土は砂粒を多量に含む。焼成良好で、青灰色。10とセット	"
12	須恵器 杯 蓋	"	口 径 11.5 器 高 3.6	ㄣ	天井部は未調整。他は横ナデ調整。胎土は細砂粒を含む。焼成良好で、暗青灰色を呈す。13とセット	
13	須恵器 杯 身	"	口 径 10.2 立上り 0.8 器 高 3.7	ㄣ	底部は未調整。他は横ナデ調整。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で、青灰色。底外面に粘土靱巻上げ痕。	
14	須恵器 杯 蓋	"	口 径 11.7 器 高 3.5	ㄣ	天井部は未調整。他は横ナデ調整。胎土は砂粒を含む。焼成良好で、青灰色を呈す。	
15	"	"	口 径 10.7 器 高 2.8		天井部はへら削り。他は横ナデ調整。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は軟質で、暗灰色を呈す。	右廻り
16	"	"	口 径 10.2 器 高 2.9		天井部はへら削り。他は横ナデ調整。胎土は砂粒を多く含む。焼成はやや甘く、暗灰色を呈す。	"
17	"	"	口 径 10 器 高 2.9		天井部はへら削り。他は横ナデ調整。胎土は細砂粒を含む。焼成は良好で、暗灰色を呈す。	"
18	"	"	口 径 8.2 かえり 0.4 器 高 1.9		天井部は広範囲にへら削りする。内面はナデ。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良好で、灰黒色	左廻り
19	須恵器 杯 身	"	口 径 9.2 器 高 3.7		底部はへら削り。他は横ナデ調整。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で、暗灰色を呈す。18とセット	"
20	須恵器 杯 蓋	"	口 径 8.0 かえり 0.4 器 高 1.9		天井部はへら削り。他は横ナデ調整。頂部内面はナデ。胎土に小砂粒を含む。焼成軟質で灰色を呈す。	"
21	"	南トレンチ 墳 裾	口 径 12.7 最大部 15.3 径かえり 0.15		天井部はへら削り。他は横ナデ調整。胎土に小砂粒を含む。焼成良好で、暗灰色を呈す。	
22	須恵器 埴 蓋	墓 道	口 径 8.5 器 高 2.3		天井部はへら削りと未調整。他は横ナデ。胎土に小砂粒を多く含む。焼成良好で暗灰色を呈す。	
23	須恵器 杯 身	"	口 径 11.2 立上り 1.3 器 高 4.3	V	底部はへら削り。他は横ナデ調整。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で、青灰色を呈す。	左廻り
24	"	"	口 径 11.1 立上り 1.0		現存部分は横ナデ調整である。胎土に細砂粒を含むも良好である。焼成は良好で、明灰色を呈す。	
25	"	"	口 径 9.3 立上り 0.6 器 高 3.1		底部はへら削りを施し、他の部分は横ナデ調整。胎土は砂粒を含む。焼成は軟質で、暗灰色を呈す。	右廻り
26	"	"	口 径 9.8 立上り 0.6 器 高 3.0		底部はへら削りを施し、他の部分は横ナデ調整。胎土は砂粒を多く含む。焼成は軟質で、灰黒色。	"
27	"	"	口 径 9.0 立上り 0.6 器 高 2.9		底部はへら削りを施し、他の部分は横ナデ調整。胎土は細砂粒を多く含む。焼成やや不良、暗灰色。	"
28	"	"	口 径 9.3 立上り 0.6 器 高 2.8		底部はへら削りを施し、他の部分は横ナデ調整。胎土は砂粒を多く含む。焼成不良で、暗灰色。	"
29	"	"	口 径 8.6 立上り 0.5 器 高 3.0		底部はへら削りを施し、他の部分は横ナデ調整。胎土は微砂粒を多く含む。焼成良好で灰色を呈す。	"
30	"	"	口 径 9.2 器 高 3.5		底部は未調整で、器表は粗である。他は横ナデ調整。胎土は砂粒を多く含む。焼成良好で灰色。	
31	"	"	口 径 9.3 器 高 3.1		底部は未調整で、器表は粗である。他は横ナデ調整。胎土は細砂粒を含む。焼成良好で青灰色。	
32	"	"	口 径 9.1 器 高 3.2		底部は未調整で、他の部分は横ナデ調整。胎土は砂粒を多く含む。焼成は軟質で、灰色を呈す。	

土 器 観 察 表 (2)

遺物 番号	器 種	出 土 地 点	法 量 (cm)	へら記号	調 整 法 及 び 特 徴	砂 粒 の 移動方向
33	須恵器 埴	墓 道	口 径 3.8 胴 部 径 9.7 器 高 8.0		底部は手持ちへら削り。体部はカキ目調整し、他は横ナデ。胎土は良好。焼成良好で、小豆色を呈する。	
34	須恵器 甕	〃	口 径 10.2 胴 部 径 8.2 器 高 12.1		底部は手持ちへら削り。頸部以下はカキ目調整し、内面は横ナデ。胎土砂粒多い。焼成良好、暗灰色。	
35	須恵器 高 杯	〃	口 径 13.0		体部は5条の沈線が入る。内外面とも横ナデ調整。胎土に小砂粒を含む。焼成は良好で、灰色。	
36	須恵器 平 瓶	〃	口 径 6.6 胴 部 径 15.7 器 高 13.1	ㄣ	底部はへら削りを施し、他は横ナデ調整。胎土は小砂粒を多く含む。焼成軟質で、小豆色を呈す。	右 廻 り
37	須恵器 甕	〃			頸部外面は平行叩き上を横ナデ、胴部外面は平行叩き、外面は弧状叩き。焼成軟質で、灰黒色。	
38	土師器 高 杯	〃	口 径 14		内外面ともへら研磨調整である。胎土は良好で、雲母を含む。焼成良好で、茶褐色を呈す。	
39	土師器 碗	〃	口 径 13.9 器 高 6.8		底部は手持ちへら削りを施す。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良好であり、黄褐色を呈す。	
40	土師器 台付碗	〃			2条の平行沈線を配する。沈線直下の底部はカキ目調整。胎土は良好。焼成は良好で、明褐色。	
41	〃	〃	脚 裾 径 8.4		杯部底面はカキ目を施し、他の部分は磨滅により不明。胎土は良好。焼成は良好で、茶色を呈する。	
42	土師器 高 杯	〃	脚 裾 径 13.0		調整法は磨滅により不明。胎土は良好。焼成やや甘く、茶色を呈す。	
43	〃	〃	口 径 13.0 底 径 10.4 器 高 9.8		杯部内面はへら研磨を施す。他はナデ調整である。胎土は雲母を含む。焼成はやや甘く、黄褐色。	
44	〃	〃	口 径 13.3	ㄱ	脚部内外面はへら削り。杯部は磨滅のため不明。胎土は良好である。焼成はやや甘く、茶色。	
45	〃	〃	脚 裾 径 9.4		脚部内面はへら削り、外面はへら研磨。外面は丹塗り。胎土は良好。焼成良好で黄褐色。	
46	〃	〃	脚 裾 径 10.5		脚部内面はへら削り。外面は全面にうるしを塗る。胎土は小砂粒を含む。焼成は良好で、黄褐色。	
47	〃	〃	脚 裾 径 10.8		脚部内面はへら削り。外面は横ナデ。外面丹塗り。胎土は良好である。焼成は良好で、黄褐色。	
48	〃	〃	脚 裾 径 12.5		脚部内面は沈線を施し、外面はへら研磨。外面丹塗り。胎土は良好である。焼成は良好で黄褐色。	
49	〃	〃			脚部内面はしほり痕が残る。横ナデ調整である。胎土には微砂粒を含む。焼成は良好で淡赤褐色。	
50	土師器 杯	玄 室	口 径 14 底 径 8 器 高 3.5		糸切り底である。体部内外面は横ナデ、底部内面はナデ。胎土は雲母を含む。焼成良好で灰褐色。	
51	〃	前 室	口 径 13.9 底 径 11.3 器 高 2.6		糸切り底である。体部内外面は横ナデ、底部内面はナデ。胎土は良好。焼成は良好で黄褐色を呈す。	
52	〃	玄 室			横ナデ調整である。胎土は良好である。焼成は良好であり、黄褐色を呈す。	
53	〃	〃			糸切り底である。外面は横ナデ、内面はナデ調整。胎土は良好である。焼成は良好で黄褐色を呈す。	
54	瓦 器 杯	〃	口 径 18.3		口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面はへら削り。内面はへら研磨。胎土に砂入る。焼成良好、淡灰色。	

Ⅳ 神籠石の調査(付図3)

女山神籠石は昭和10年に石野義助氏が初めて調査を行ったが、それ以降、今回まで大きく4次の調査を経ている。いまそれを便宜的に次のように区切っておく。

第1次 昭和10年

第2次 昭和42年(付図3のⅡ-1・2)

第3次 昭和46年(ⅡのⅢ)

第4次 昭和56年(ⅡのⅣ)

1. 第2・3次の調査

a. 第2次調査(第12図、付図3、図版14・15)

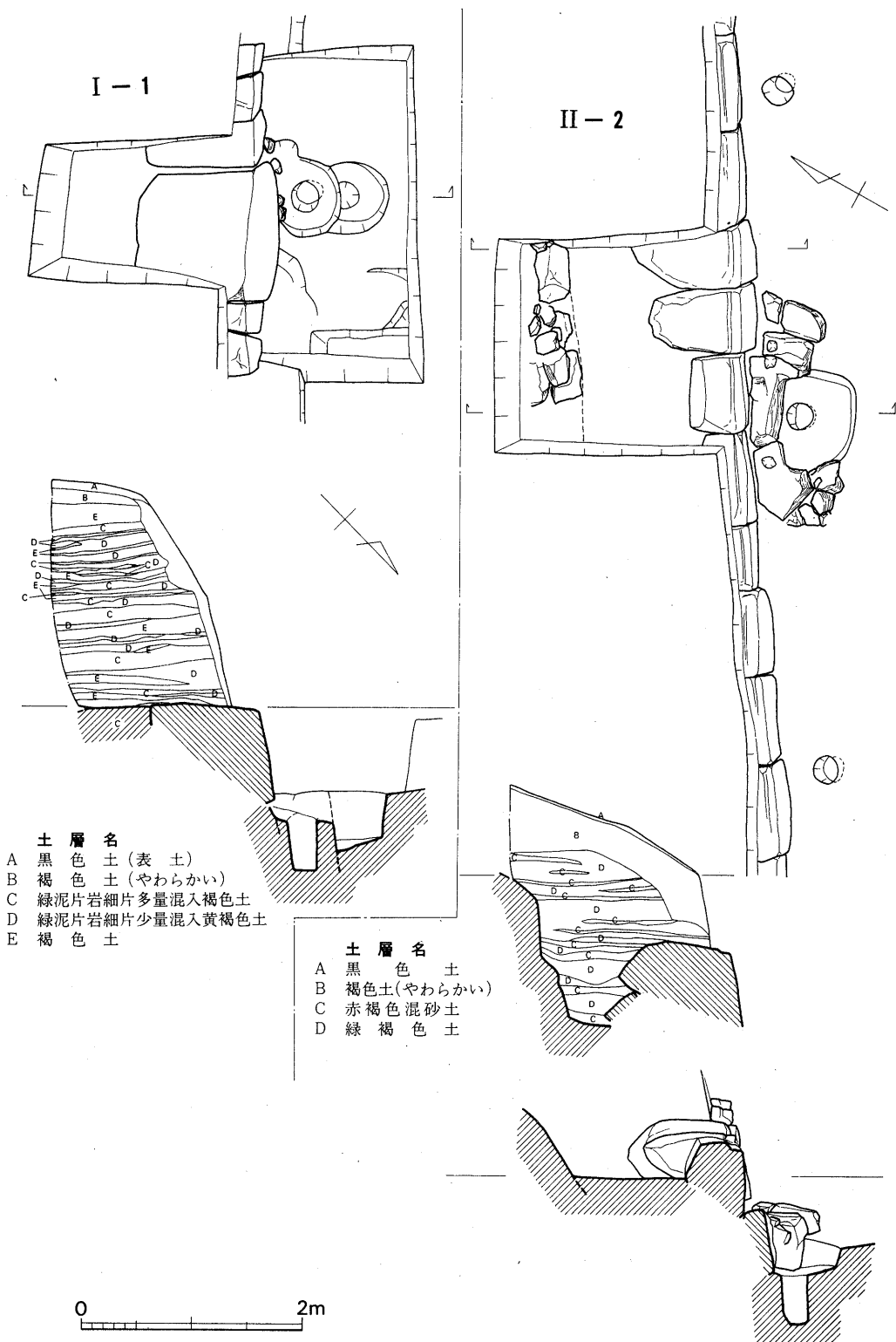
(1) 調査に至る経過

この調査は土取り工事による列石崩壊を契機に行ったものである。

昭和40年5月神籠石隣接地において土取り工事が開始され、その影響によって列石が約100mにわたって崩壊した。県教育委員会は即刻現地調査を行うとともに防止策の検討をはじめた。一方管理団体である瀬高町からは神籠石付近一帯の土地を買収することによって保存活用の方途を講ずることが抜本的対策であり、そのためには学術的調査を実施することが必要であるとの意見書が提出された。これにより昭和41年度事業として瀬高町が調査主体となり発掘調査を実施することとなった。調査は瀬高町の依頼を受けた石松好雄(現九州歴史資料館調査課長)、柳田康雄(現文化課技術主査)が行った。調査期間は昭和42年3月17日～4月14日である。

(2) 調査経過

女山神籠石は明治32年に『東京人類学会雑誌』に紹介されてから昭和10年に至り、石野義助による列石の調査が行われている。その報告によると粥餅谷、長谷、源吾谷、産女谷の四つの水門と列石766個が確認されている。これらは粥餅谷水門と東側の標高203mの頂上部とを結ぶ線の南側にあり、この当時においても北側についての列石は確認されていない。これについて石野義助は「列線不明の部分に就きては元来列石ありしや否や疑問を懐く者あり、殊に今回の調査に於いても東部方面並北部方面に於て列石らしきものを発見せざりしは遺憾なるも、他の地方に於ける神籠石と称する物の実例に綴するも関聯せるは信じ得べし。此の附近の社寺、殿堂、墓碑、溝梁、石橋等多数を使用し有ると見れば存在せる物を持ち去られたるは事実なるべし。永興寺並同寺内東照宮跡、長田権現、英彦山神社等には殊に多数使用し有るを見受けたり」と記しており、北側部分については持ち去られたものとしている。その後昭和28年に水門跡と



第12図 女山神籠石第2次調査検出列石・柱穴実測図(1/60)

列石線が国の史跡として指定され保存されることとなり現在に至っている。

調査は、以上述べた列石が確認されていない北半部の確認調査を主体とし、一部列石についても行うこととした。まず東側列石線については粥餅谷水門跡までで列石が途絶えているが、調査にあたっては水門跡南側の列石線の標高を参考にして6本のトレンチを設定した。調査の結果は、いずれのトレンチにおいても地表より約1mほどで緑泥片岩の岩盤に達し、列石はもちろん土塁の版築の痕跡すらも認められなかった。次に西側については標高203.6mの頂上部の少し手前で列石は切れている。この付近は、みかん園造成によって地形が大きくかわっており、また土地所有者の了解を得られないこともあって予定どおりの調査を実施することができなかった。トレンチはみかんの樹木の間をぬって長さ3mほどのもの5本と農道沿いに長さ12mのものを列石推定延長線にほぼ直角に設定し調査を行った。その結果みかん園内のトレンチでは造成による攪乱がはげしく列石・土塁の版築とも確認されなかった。また農道沿いのトレンチでは東側はすでに岩盤が露出しており、西側では片岩の礫をまじえた黄褐色の土が深く堆積しており、結果は同様であった。またこの頂上部北側の東斜面は岩盤の露出した急斜面になっており念のため踏査を行ったが列石は確認できなかった。

次に列石については2箇所（第12図）で調査を行った。まず粥餅谷水門跡南側にある日子神社の参道沿いに列石が一部露出しており、その背後には土塁状の高まりが認められる。そのため、その一部について試掘を行ったところ、第12図に示すごとく列石前面に直径0.3mの柱穴と列石背後では石の天端から約2mの厚さの版築を確認できた。また東側列石の頂上部より南西へ約150mのところでは第12図に示すように列石前面に2間分の柱穴を検出した。柱穴はいずれも0.2m前後で、深さは列石下端面から0.7~0.8mで、やや内側に傾斜している。柱穴の間隔は帯隈山の調査結果と一致している。

以上述べたように、今回の調査においては南側の列石部分では、その前面に柱間隔3m（10尺）の柱穴が検出されるとともに、背後には版築による土塁の存在することが明らかになり、おつば山や帯隈山と同様の構造であることが判明した。しかしながら北半部では今回も列石・土塁とも確認されなかった。この北半部における列石・土塁の存否については石野義助も報告しているごとく後世持ち去られた可能性も十分考えられるが、今回の調査結果およびみかん園造成工事の際にもそのような痕跡の存在が報告されていない事などから本来構築されなかった可能性もでてきた。この点については今回の調査のみで結論を出すことは早急であり、さらなる調査が心要と考える。

b. 第3次調査（付図4・付図3、図版16）

(1)調査に至る経過

この調査は第2次調査同様に土取り工事に起因する列石崩壊を契機に行った測量調査である。

昭和44年4月源吾谷水門跡と産女谷水門跡との間の私有地にブルドーザーが入り列石内部からの土取り工事が開始された。このため産女谷水門は進入路の下に埋めたてられるとともに土砂の崩壊にともない列石の一部が崩壊するにいたった。このため水門の位置確認のための緊急調査を行い、同時に記録保存のために列石線の測量調査を実施した。調査には渡辺正気、石松好雄、亀井明德、横田賢次郎、森田勉、高橋章があたった。調査期間は昭和46年7月1日～7日である。

(2) 調査経過

今回調査を行った源吾谷水門跡と産女谷水門跡との間の列石の状況については昭和10年の石野義助による調査の段階では必ずしも明らかではなく石野は次のように報告している。「源吾谷水門跡は石を取り去られて殆んど形を存せず、僅かに数石を残すのみなり。源吾谷水門跡より南方へ掘開の跡破片等を見つつ約111米にして標高55米の線に9石を発掘す。之れより又67米にして列石を発掘す。此の付近山腹急傾斜にて発掘困難なりしも中に大なる岩石の崩落せる所を除き、42石を発掘す。之れより南方には若干埋没せるならん。之れより5分の1の傾斜にて90米南方に下り産女谷水門跡に至る。産女谷水門跡は大部破壊されたるも今尚水止口附近が明確に存在せるは幸なり。」

調査はまず水門跡の位置確認からはじめた。水門跡付近は土取り工事のため地形が大きく変わっており見当もつかないような状態であった。このため土取り工事によって露出した列石を手がかりに調査を進めたところ工事用進入路の下に、ほぼ東西方向に天井石を検出した。その状況から水門自体は毀損を受けていないと判断されたため位置を確認しただけにとどめ調査を打ち切った。

次に列石については、さきに引用したごとく両水門間には51個の石が確認されているが、産女谷水門跡に接した北方については「若干埋没せるならん」とあり列石は確認されていない。今回の土取り工事にともなって調査を行った範囲はこの水門跡から北方約100mの所までである。調査を行った段階では、土取りはかなり進行しており列石に沿って工事用道路が設けられていた。このため列石がかなりころげ落ちており惨憺たる有様であった。また壁面に露出した列石の間には版築が歴然と観察できたが、その主要部分は完全に取り去られていた。列石は標高27mの水門跡から山腹に沿って北方へ徐々に上っていき、今回の調査範囲の北限、すなわち水門跡より約100mの所では標高48mを測る。水門跡から北へ約35mの所までは工事によって列石は完全に取り去られていた。この地点から、さらに北方の100mの地点までの約65mの範囲では抜き取り痕跡を含めて35個の列石と版築を確認した。しかしながら今回の調査は列石裏側からの観察であり、したがってほとんどの列石の形状、寸法については明らかではない。また列石前面に当然予想される柱穴についても土取りが列石直下までなされていたこともあり崩壊の危険性が十分予測されたため今回は列石線を確認しただけにとどめ、あえて発掘調査は行

わなかった。

2. 第4次の調査

今回調査したのは山内2号墳のすぐ東側にある列石群である（第13図、付図2）。

調査地点は、女山神籠石に4つある水門のうち最南の産女谷水門から東に約350m離れており、昭和10年に石野義助が作成した実測展開図にて^{註(1)}せばNo.580前後の所である。

当該地はすぐ南側が土取り工事によって大きく崩れ去っており（字椎拾谷B地区）、ここに存した列石の多くが既に崩落して旧状をとどめていない。今回調査した列石群も近い将来に崩落^{註(2)}してゆかぬとも限らない。

発掘調査の主眼は、山内2号墳の墳丘と神籠石列石との関係の把握、列石前面の柱穴群の確認という2点において行ったが、以下、(1)列石背後の調査、(2)柱穴群の調査に分けて述べる。

(1) 列石背後の調査（第6・14図、付図2、図版18）

山内2号墳との関係を見るために墳丘切断トレンチを列石の所まで延ばして調査した（第6図、付図2）が、墳丘と列石裏込め版築との先後関係は不明である。列石の背後は、第14図に見るように、竪穴状に垂直に近く地山の岩盤を削り出して、約0.75m離して列石を据え置いた後、裏込めで版築を行う。版築は赤褐色土と、地山の岩盤を削り出した際に得られた灰褐色土を基調に、交互に叩きしめて積んでいる。この上に土塁の如き構築物があったかどうかは、痕跡をとめていないこともあり否定的に^{註(3)}考える。

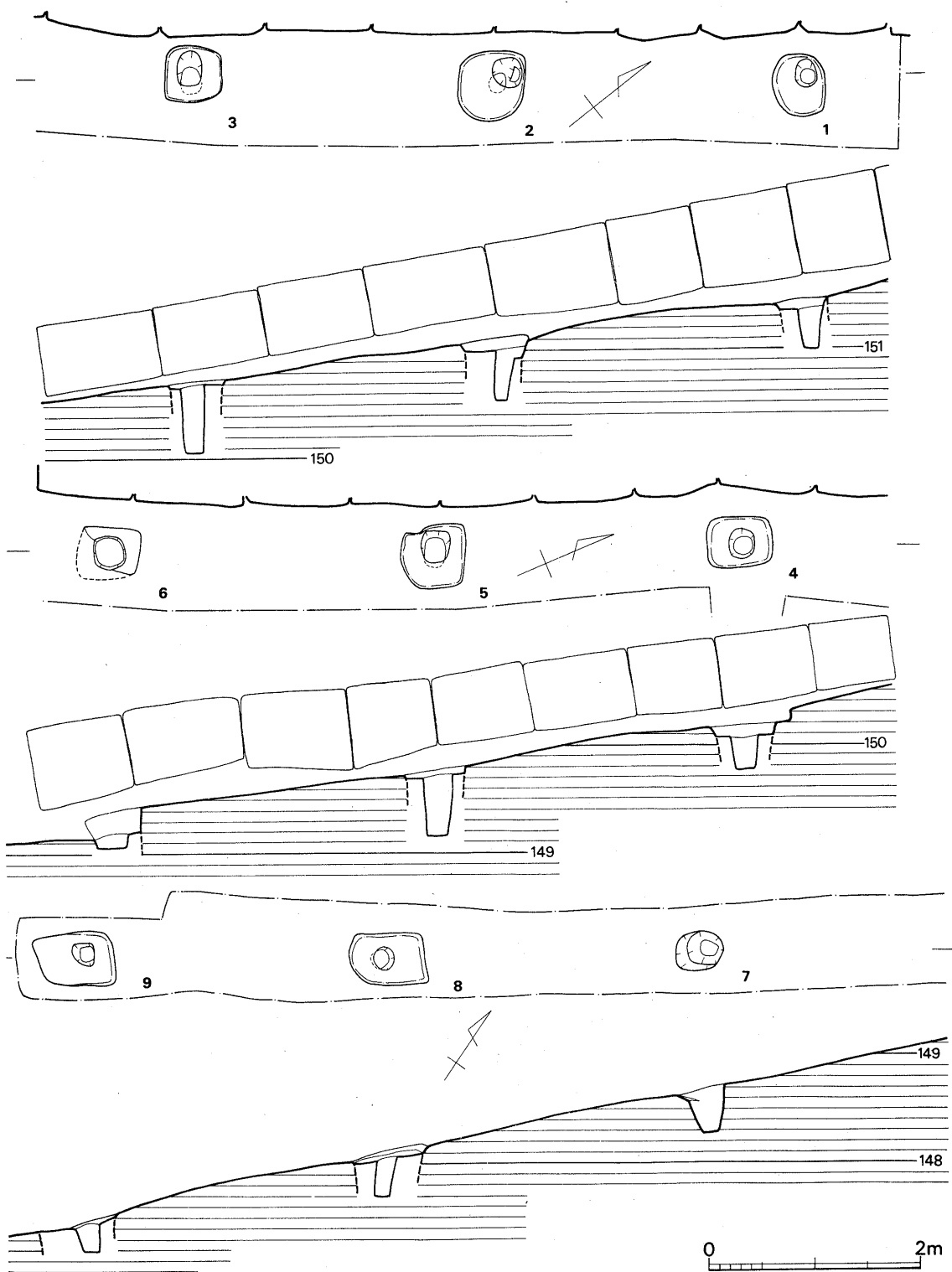
第14図は亀裂の入っている所（付図2のP₁—P₂）にトレンチを設けて土層を見たものである。ここは地山の岩盤の削り出しは緩やかな傾斜をもたせているが、裏込め版築の様相は先述のものと変わらない。

(2) 柱穴群の調査（第13・14図、付図2、図版17・18）

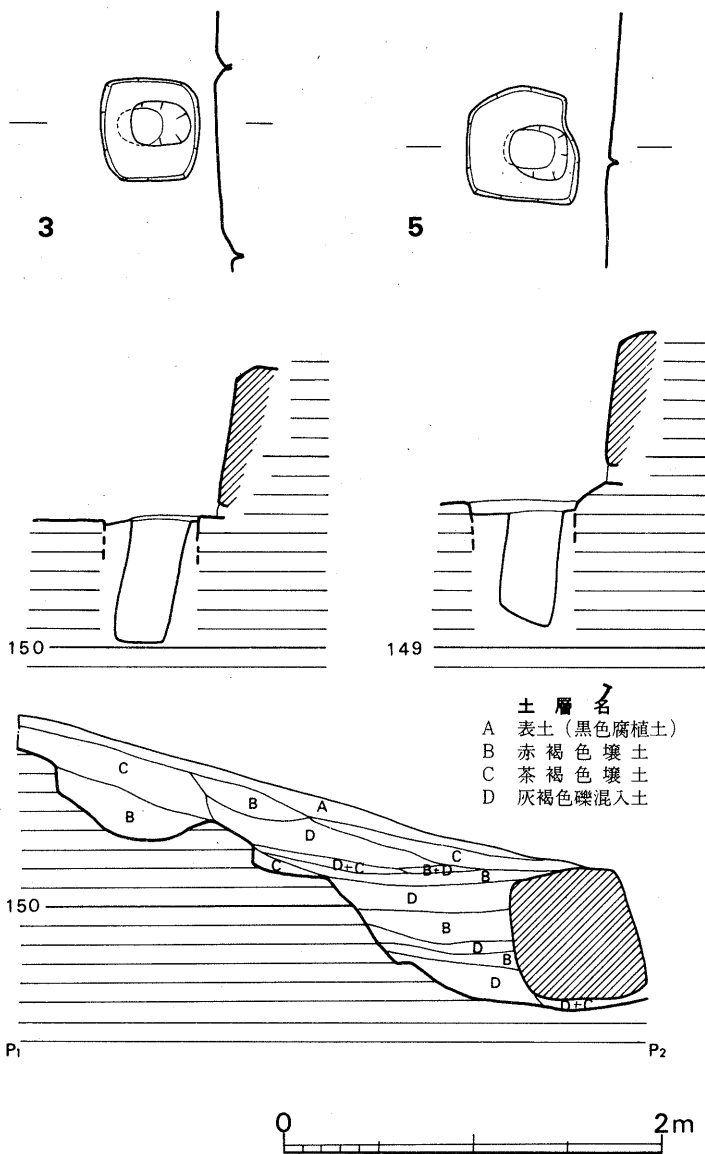
列石前面の下端から幅1m強、長さ25mにわたってトレンチを設け、柱穴を9個確認した。いま便宜的に、東北から南西（高い方から低い方）へ1～9の番号を付す。

柱穴は7を除いて大きめの掘り方を持ち、およそその中心に近く柱を据えた後、裏込めを行っている。7の掘り方はあまり大きくない。掘り方の平面プランは隅円の方形・長方形のものから円形に近いもの（7）まであり、規則的とはいえない。柱穴の計測等については第2表を参照。なお、以前の女山神籠石の調査で、柱穴掘り方の回りに石組みのあるのを見るが、今回分にはそのような例はなかった。付言するに、柱穴埋土と地山との識別が容易でないもの^{註(4)}があり、柱穴は柱が腐植したのち自然に埋まったというよりは、柱を抜いて埋め込んだのではないかと^{註(5)}思わしめた。が、それは柱穴埋没の多様性を示唆するだけである。

トレンチを設けた所のみの列石をみると、前面下端幅80～100cm、高さ60～70cm、奥行き70cm前後のものがほとんどである。この所には自然石露頭を加工したものはない。また、列石^{註(5)}



第13図 女山神籠石第4次調査検出柱穴実測図 (1/60)



第14図 柱穴群・神籠石裏込め土層図 (1/40)

神籠石列石前面柱穴計測表

(単位cm)

	掘り方	柱穴底面径	深さ	傾斜	心心距離	柱穴間距離
1	50 × 58	14 × 14	47		292	277~306
2	60 × 67	15 × 18	60		288	270~305
3	53 × 51	19 × 25	67	10.5°	285	266~303
4	61 × 48	18 × 17	43		293	273~311
5	49 × 48	19 × 27	61	6.5°	305	282~328
6	58 × 49	26 × 26	35		294	271~314
7	43 × 36	17 × 14	43		310	293~326
8	72 × 49	17 × 17	43		274	262~290
9	74 × 50	14 × 14	29			
平均	57.778 × 50.667	17.667 × 19.111	47.556		292.625	274.25~310.375

- 掘り方の数値は柱穴底面の中心を通過して直交するように計測
- 掘り方と柱穴底面径の数値は横方向 (東北-南西) が先
- 深さは確認した面からのもの
- 傾斜は列石方向へのもの

前面上端にL字状の段を造り出しているものはここにもあるし、他の地点にも多く見うけられる（図版21）。

- 註(1) 石野義助「筑後女山神籠石」（福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第十輯） 福岡県教育委員会 1935
- (2) 磯村幸男『史跡女山神籠石保存管理計画策定報告書』 瀬高町教育委員会 1978
- (3) この女山神籠石の他の地点では註(1)文献で土塁の存在を示唆しているが、昭和42・46年の調査では実際に確認している（本報告Ⅳ－1 参照）
- a. 鏡山猛「古代の城柵跡——西日本——」新版考古学講座 6 雄山閣 1970
- b. 石松好雄「女山神籠石」 考古学ジャーナル 117 1976
- (4) 註(2)、註(3) a 文献参照
- (5) 他の地点では数ヶ所に自然石利用の列石が見られる（図版21）。

V 小 結

1. 墳丘・石室について

山内1・2号墳は標高158mの見張りの良い高所に築造された横穴式石室を内部主体とする円墳であり、平野部を見おろす西北西方向にいずれも開口するものである。墳丘の規模は1号墳は13.8m、2号墳は13.85mを測る全く同一規模のものであり、企画性を有するものであろう。ちなみに両墳の数値を高麗尺（1尺：35cm）にあてはめると1号墳は39.4尺、2号墳は39.6尺となり、ほぼ40尺に近い数値を得ることができる。石室の平面形は1号墳は長方形の単室横穴式石室であり、2号墳は胴張りの複室横穴式石室である。墳丘内における石室の構築位置は、1号墳は石室全長の中央部に墳丘の中心があり、2号墳は、奥壁の中心が墳丘の中心であることから、石室構築に際しては何らかの設計のもとに行われたことが考えられる。また、胴張りプランの石室についても、何らかの設計に基づいて構築されたものと思われるため、後・前室の側壁の弧をもとに石室の中心と半径を求めてみた。

後 室	右壁の半径	2.03m
	左壁の半径	2.1 m
前 室	右壁の半径	1.38m
	左壁の半径	0.85m

となり、それぞれの石室内に円弧の中心を求めることができるが、前室については半径の値が異なるため当然のことながら、中心点には何らの法則性もみられない。このことについて石

山勲氏は広川町鈴ヶ山1号墳の胴張りプランの石室設計法について考察されているので参照されたい。^{註(1)}

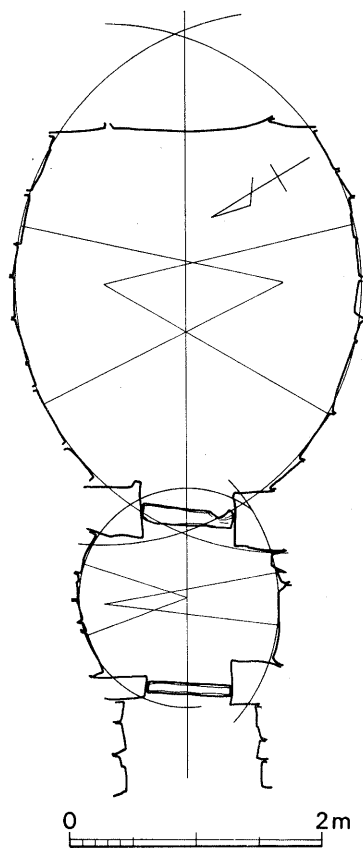
2. 出土遺物について

出土遺物は2号墳の前室から馬具類が、墓道からは土器がまとまって出土したが、出土量は少ない。

須恵器にみられるへう記号はㄣ・Λ・𐤎の3種類があり、ΛはⅢB期の杯身外底に、ㄣはⅣ期の杯蓋、杯身の外面にみられ、𐤎はⅣ期の平瓶の肩部に刻されている。周辺部における須恵器窯跡は八女市塚ノ谷等で調査が実施されているので、同一へう記号の有無を検討してみる。^{註(2)}ㄣは塚ノ谷1号窯(Ⅴ期を主体とする)出土品に見られ、同じく塚ノ谷4号窯(Ⅲb期)にもみられる。Λは塚ノ谷1号窯出土品にみられる。𐤎はみられないが、塚ノ谷4号窯では𐤎があり、若干似通った形状を呈する。ㄣ・Λについては、かなり普遍的にみられるへう記号であるため、同一記号を持って、同窯跡との需給関係は即断できない。

山内2号墳出土(第10図33)の須恵器埴は特異な形態のものがあるが、この土器と似たものが、広川町鈴ヶ山2号墳出土品(Fig30の97)にあり、興味深い。また山内1号墳出土土師器高杯(第5図8)は特異な形態の杯部であり、これとそっくりの土器が、当該墳とは近距離にある瀬高町名木野古墳群7号墳から出土(第10図32)しており、同一供給路をもつものと考えられる。^{註(3)}

1号墳出土の土器は6世紀後半～6世紀末に比定されるものであり、石室の構築年代は6世紀半に比定できよう。2号墳出土の土器は6世紀後半と6世紀末のものが検出されており、それぞれ初葬時、追葬時の遺物と判断され、石室の構築年代は6世紀後半に比定されよう。なお、墳丘裾部付近の堆積土出土の須恵器杯蓋は7世紀後半代に比定されるものであり、神籠石と何らかの関係を有するものであろうか。古墳と神籠石との先後関係は残念ながら把握できなかった。



第15図 2号墳石室設計法 (1/60)

山内2号墳出土(第10図33)の須恵器埴は特異な形態のものがあるが、この土器と似たものが、広川町鈴ヶ山2号墳出土品(Fig30の97)にあり、興味深い。また山内1号墳出土土師器高杯(第5図8)は特異な形態の杯部であり、これとそっくりの土器が、当該墳とは近距離にある瀬高町名木野古墳群7号墳から出土(第10図32)しており、同一供給路をもつものと考えられる。^{註(3)}

1号墳出土の土器は6世紀後半～6世紀末に比定されるものであり、石室の構築年代は6世紀半に比定できよう。2号墳出土の土器は6世紀後半と6世紀末のものが検出されており、それぞれ初葬時、追葬時の遺物と判断され、石室の構築年代は6世紀後半に比定されよう。なお、墳丘裾部付近の堆積土出土の須恵器杯蓋は7世紀後半代に比定されるものであり、神籠石と何らかの関係を有するものであろうか。古墳と神籠石との先後関係は残念ながら把握できなかった。

註(1) 「鈴ヶ山古墳群の調査」 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 1972

福岡県教育委員会

(2) 「塚ノ谷窯跡群」 八女古窯跡群調査報告Ⅰ 1969 八女市教育委員会

(3) 「名木野古墳群」 瀬高町文化財調査報告書 第1集 1977 瀬高町教育委員会

3. 神籠石について

全国に13ヶ所の分布をもつ神籠石の提起する問題は多々あるが、性格についてはほぼ山城説に統一されている。ただ、どこの神籠石をみても、列石線内部の地形は出入りが多く、かつ平坦地をほとんど有しないから、恒常的に滞在するにはあまり適当な所とはいえない。山城としての実態は今後の調査に俟つところ大である。

ここでは、今回の発掘結果をもとに、神籠石の年代について若干触れてみたい。

神籠石の年代については、これまでに多くの人々が説を唱え、古くは邪馬台国に結びつけて3世紀代に比定する考えさえあるが、大半は6世紀から7世紀のいずれかの時期におくものである。その中で現在のところ最も普遍的かつ説得性をもつと思われるのは、7世紀中葉以降の築造とするもので、ことに鏡山猛氏は列石前面の柱穴間隔や土塁等に唐尺の使用が認められるのを根拠にされている。神籠石からの出土遺物が見られぬ現今では、最も有力な説と考える。

今回の調査でも神籠石に直接関係する遺物の出土はなく、かつまた最も期待していた山内2号墳との先後関係も不明のままであった。そこで、検出した9個の柱穴について柱穴間の距離に尺度使用が認めうるか見てみよう。

8つの柱穴間距離の数値を見ると(第2表)、8と9の間隔が若干狭いものの、心心距離の最小274cm、最大310cm、平均292.6cmである。心心距離でなく柱穴底面幅を含めてみると、平均274~310cmとなる。この数値は大宝令で採用したといわれる唐尺(1尺=29.5cm)の10尺にほぼ近いものである。また、大宰府蔵司出土の木製物尺は1尺=29.99cmと30.20cmであるが、この尺度を使用しても矛盾はない。

要するに、柱穴間の距離を見るにおいては、唐尺における大尺の使用を認めうるのである。唐尺のわが国での使用開始は大宝令より溯り、ほぼ7世紀中頃と考えられている。因みに、8つの柱穴間計測値に高麗尺(1尺=約35cm)をあてれば、およそ8尺(=280cm)あまりとなるが、これでは不適當である。

ところで、山内2号墳の南トレンチにおいて7世紀後半に比定しうする須恵器杯蓋の破片が出土している(第10図21)。出土したのは石室中心から9mあたりで、現地表より40cmほど下の層である。この地点では古墳の盛土はすでに切れており、古墳と直接関係のある土器とは思われない。かといって、この須恵器が神籠石と関係ありとするのもまた早計といわねばなるまい。しかし、関連性の可能性だけは指摘しておきたい。

なお、山内1号墳・2号墳の墳丘は径14m弱であり、これは高麗尺ならばほぼ40尺となる。先に、神籠石列石前面柱穴の間隔には高麗尺の使用は認め難いとしたが、高麗尺から唐尺へと使用尺度の時期的変遷が認められるとすれば、古墳→神籠石という関係はでてくる。が、このことは未だ強調するのは控えよう。

結論としては、神籠石の築造は山内古墳群より後出し、ほぼ7世紀後半頃に比定しておきた

い。

- 註(1) 考古学ジャーナル117号は神籠石特集であり、その中に学史的展望も記されている。以下、これに拠る所も多い。
- (2) 鏡山猛「古代の城柵跡——西日本——」 新版考古学講座 6 雄山閣 1970
なお、柱穴間隔が3 mであるのを確認したのは佐賀県武雄市おつば山神籠石、佐賀市帯隈山神籠石の調査による。
- (3) 量博満「ものさし」 世界考古学辞典 平凡社 1979
- (4) 唐尺の1尺については約30cmとするのが大方のようであるが、厳密に固定した数値でなく使用するに際して若干の幅があるようである。およそ29.2~30.2cmの幅の中と考えておけばよからう。
- (5) 亀井明德編『大宰府史跡——昭和45年度調査の概要——』 福岡県文化財調査報告書 第47集 福岡県教育委員会 1971

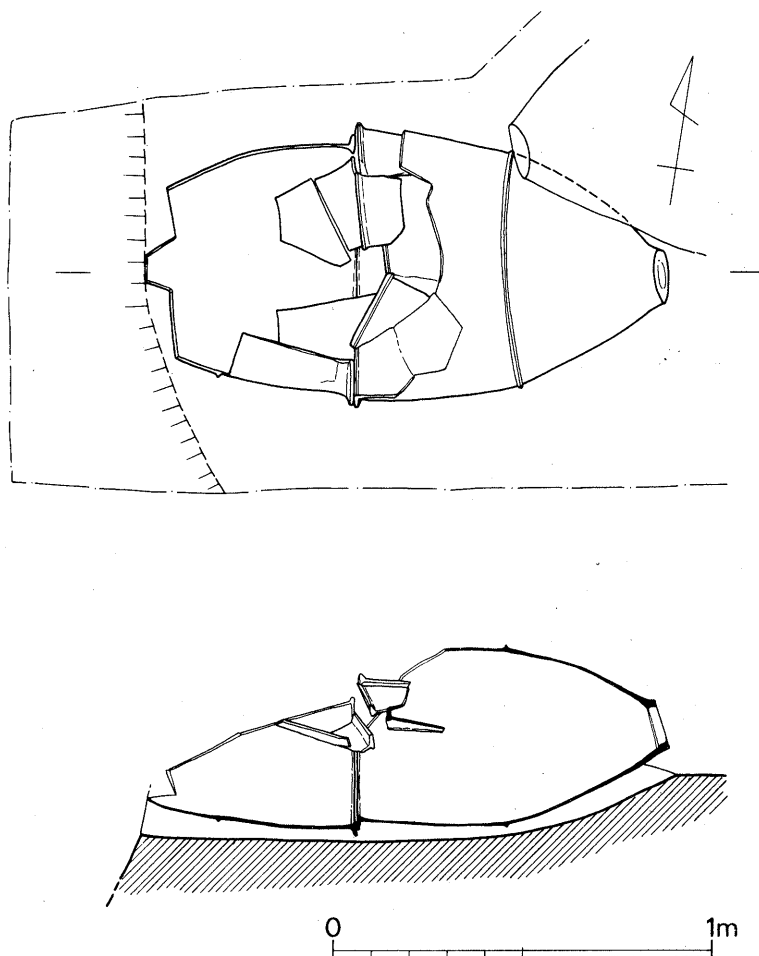
付編 周辺遺跡の調査

1. 堤遺跡出土の甕棺墓

遺跡は瀬高町大字山門堤の集落内に所在する。当該地は福岡県遺跡等分布地図（大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編）所収790311~790322の堤古墳群の範囲内にある。この度、当該地に部落の公民館を建設する計画が起ったため、昭和56年12月8日町社会教育課より試掘調査の依頼が県文化課へなされた。当該地には箱式石棺が所在するという村山健二氏の指導・助言のもと、川述と伊崎が試掘調査を実施した。この結果、甕棺墓2基が検出された。工事に伴って当該甕棺墓が破壊される心配はなかったが、地元の要望もあって、調査して取りあげた。甕棺墓は一部を接して埋置されており、2号棺の方が後から埋置された様に思えた。2基の甕棺はともに弥生時代中期前半に属すると思われる。

1号甕棺墓（第16・18図、図版23・24）

成人用の合口甕棺墓である。墓壇の平面形は不明である。土圧により甕上半部は押圧されており、下甕も下半分は破壊されている。甕棺の埋置角度は3.5度であり、ほぼ水平に置かれる。若干低位置にある西側棺を下甕としたが、人骨の遺存がみられないため、頭位はどちらにとる



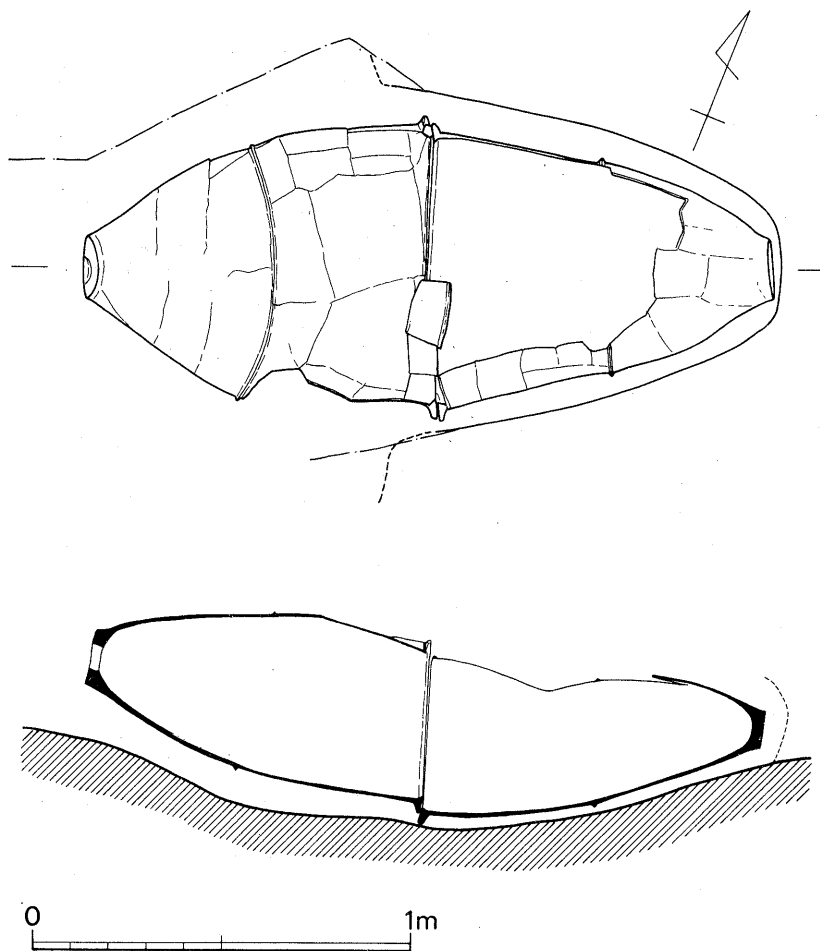
第16図 堤遺跡1号甕棺墓実測図（1/20）

ものか不明である。接口部には目貼り粘土はみられない。

上甕は平坦なT字口縁であり、胴部中ほどに1条の三角凸帯を配す。口縁部下面と凸帯下面には横方向の粗い刷毛目を施し、他は縦方向の粗い刷毛目を施す。口縁部と凸帯部は横ナデ、内面はナデ調整。口径63.2cm、現存高80cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈す。底部を若干欠損する。下甕は逆L字口縁であり、内方はわずかに下降する。胴部中ほどに1条の三角凸帯を配する。底部を欠損する。口縁部下面は横方向の粗い刷毛目を施し、他は縦方向に刷毛目を施す。口縁部と凸帯部は横ナデ、内面はナデ調整である。口径58.9cm、現存高60cmを測る。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。

2号甕棺墓（第17・19図、図版23・24）

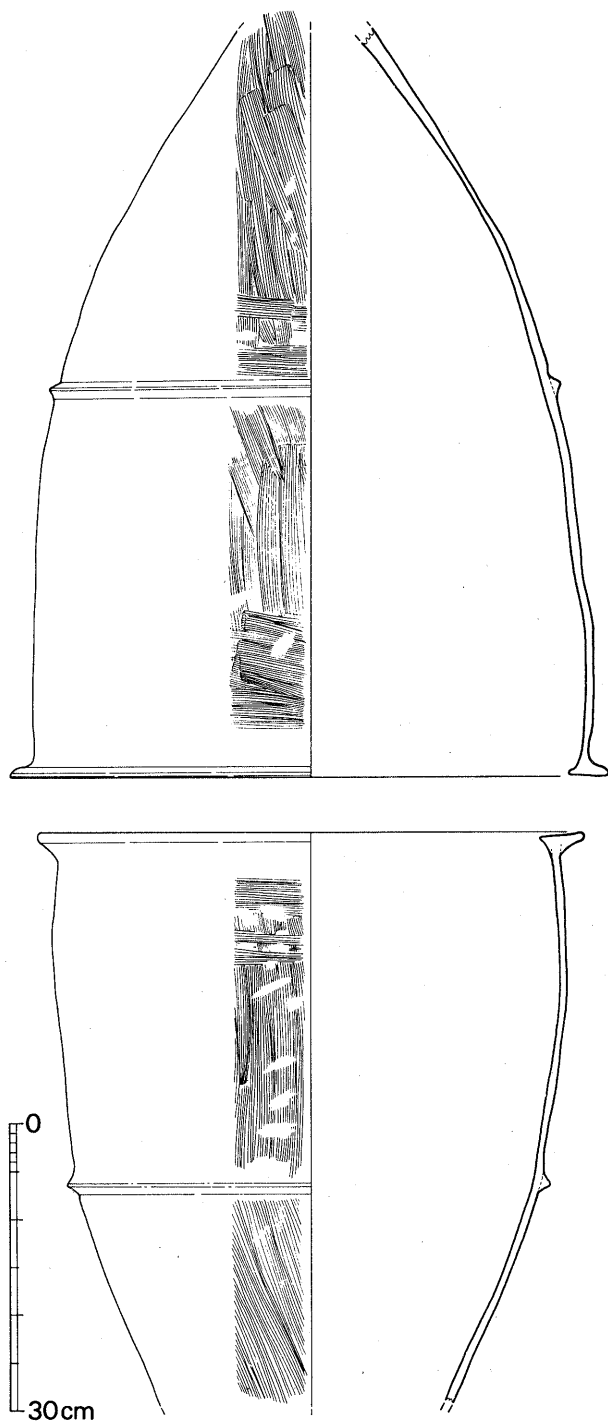
成人用の合口甕棺墓である。墓坑の平面形は不明であり、上半部分は破壊されている。土圧



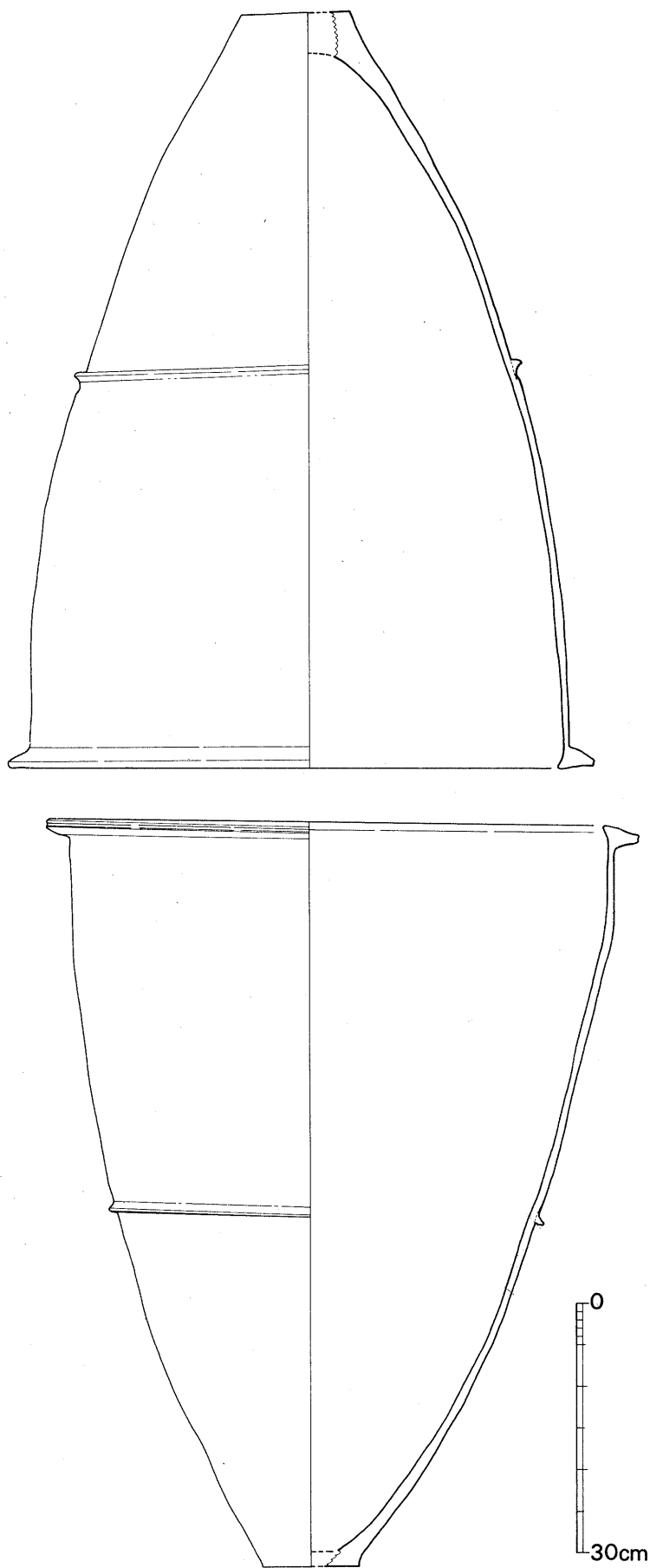
第17図 堤遺跡2号壙棺墓実測図(1/20)

により押圧されているため断面はやや扁平である。壙棺の埋置角度は7度であり、ゆるやかな傾斜をもっている。人骨は遺存しておらず、また下壙を挿入したと思われる土壇も検出できないため、上・下壙の判断に苦しむが、下方に底部の位置する東側棺を下壙とした。上壙の底部周辺は1号壙棺墓の下壙凸帯部分に接している。

上壙は肥厚させた平坦な三角形を呈し、口縁部側面は若干内弯する。胴部中ほどに1条の三角凸帯を配する。口縁部周辺と凸帯部は横ナデ、他はナデ調整である。底部を若干欠損する。口径71.6cm、器高92cmを測る。胎土には細砂粒を含み、焼成は良好で、明褐色を呈す。下壙は肥厚させた三角形を呈し、口縁端部は外方へ下降しており、口縁部側面は凹線が入る。胴部中ほどには1条の三角凸帯を配する。口縁部と凸帯部は横ナデ、他はナデ調整である。口径72.4cm器高90cmを測る。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好で、淡褐色を呈する。



第18図 1号甕棺実測図 (1 / 8)



第19図 2号墓棺実測図 (1/8)

2. 権現塚周辺遺跡出土の縄文時代遺物

山門郡瀬高町上坂田に所在する権現塚古墳の周辺には、縄文時代後晩期の遺跡として著名な坂田中園遺跡等が占地している。今回、権現塚古墳の周辺一帯の水田面の調査（川述昭人主任技師^{註(1)}が調査を担当）で縄文時代の遺物が多量に出土している。ここではその一部を紹介することにした。

縄文土器（第20・21図1～10）

各トレンチの下層から縄文土器が多量に出土している。紙幅の都合でごく一部しか図示しえないが、44トレンチ出土土器の口縁部破片（但し2のみは26トレンチ出土）から主なものを図示する。

^{註(2)}
1は、精製に近い深鉢形土器で、幅広の口縁部が稜をもって内傾し、平縁の口縁部文様帯に4条の凹線がめぐらされて、縦に3個の横長楕円形凹点が並ぶ。内傾する頸部はやや下位に内弯の中心があり、算盤玉状の屈折をする胴部に移行する。看部には浅めの沈線が1条めぐる。胎土には雲母・長石粒等を含み暗褐色～淡茶褐色に焼成される。

2は、底部から直線的に広がる胴部を有して直接口縁部が屈折して立ち上るタイプの浅鉢形土器で、上半部のみの破片だが、幅広の口縁部は突出気味の稜をもって屈折し、2条の沈線をめぐらせて屈折位に横長楕円形の凹点を付している。胎土に角閃石を多めに含み、淡澄褐色に焼成される。

3は、内弯する頸部から口縁部が屈折して立ち上る深鉢形土器の口縁部破片だが、屈折は鈍い。幅広な口縁部には3条の沈線がめぐる。やや砂粒を多めに含み暗褐色に焼成される。

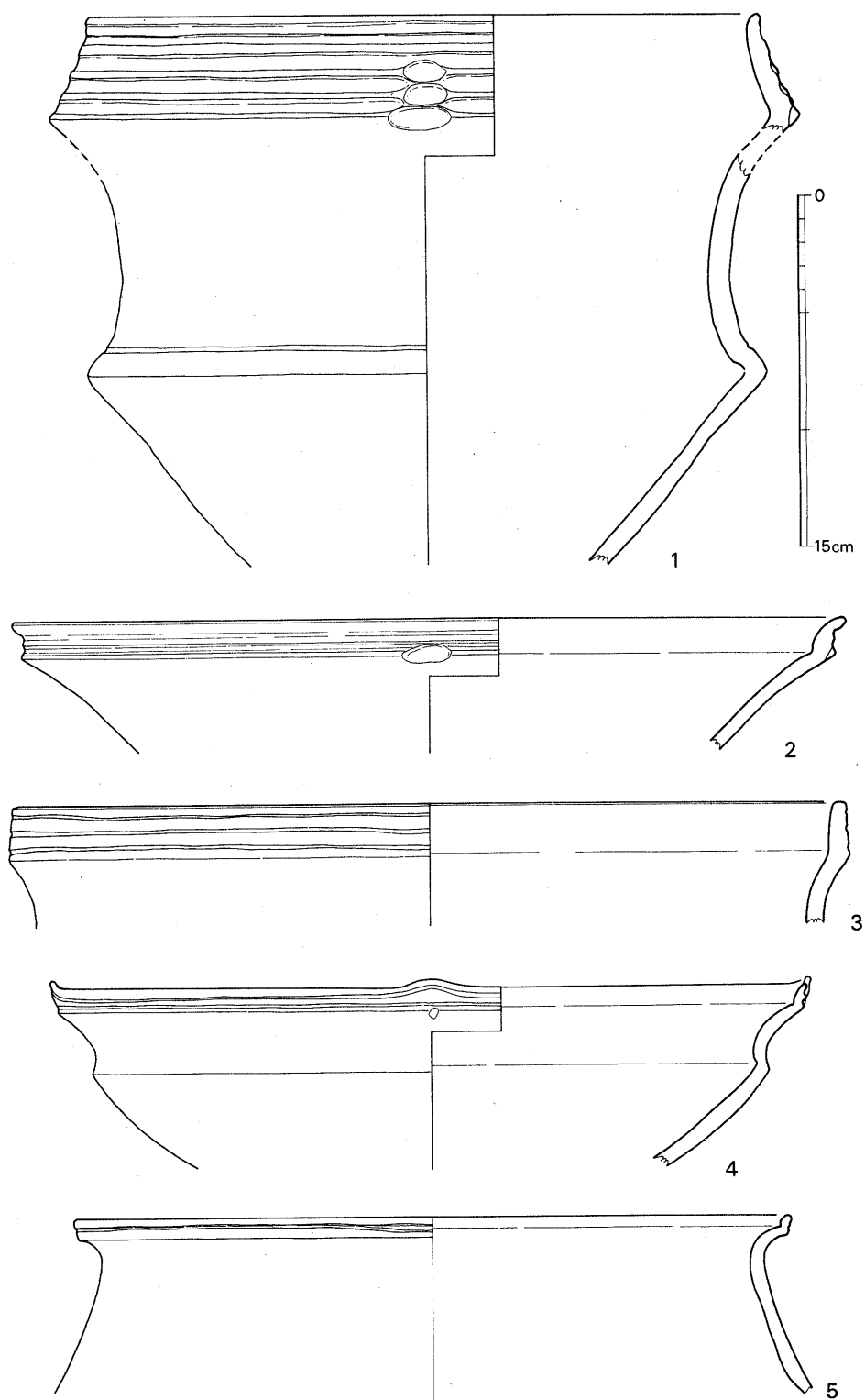
4は、長めに内弯する頸部を有す浅鉢形土器で口縁部は外開き気味に屈折する。波状口縁から退化した小突起を有す口縁部に2条の沈線がめぐり小円形の凹点が付される。角閃石、長石を胎土に含み暗褐色に焼成される。

5は、内弯の中心が上位にあり、長めの肩部を有す鉢形土器で、外開き気味の幅狭な口縁部に1条の沈線がめぐるが部分的には2条になっている。精良な胎土で明るい色調に焼成されるが内面は黒色を呈す。

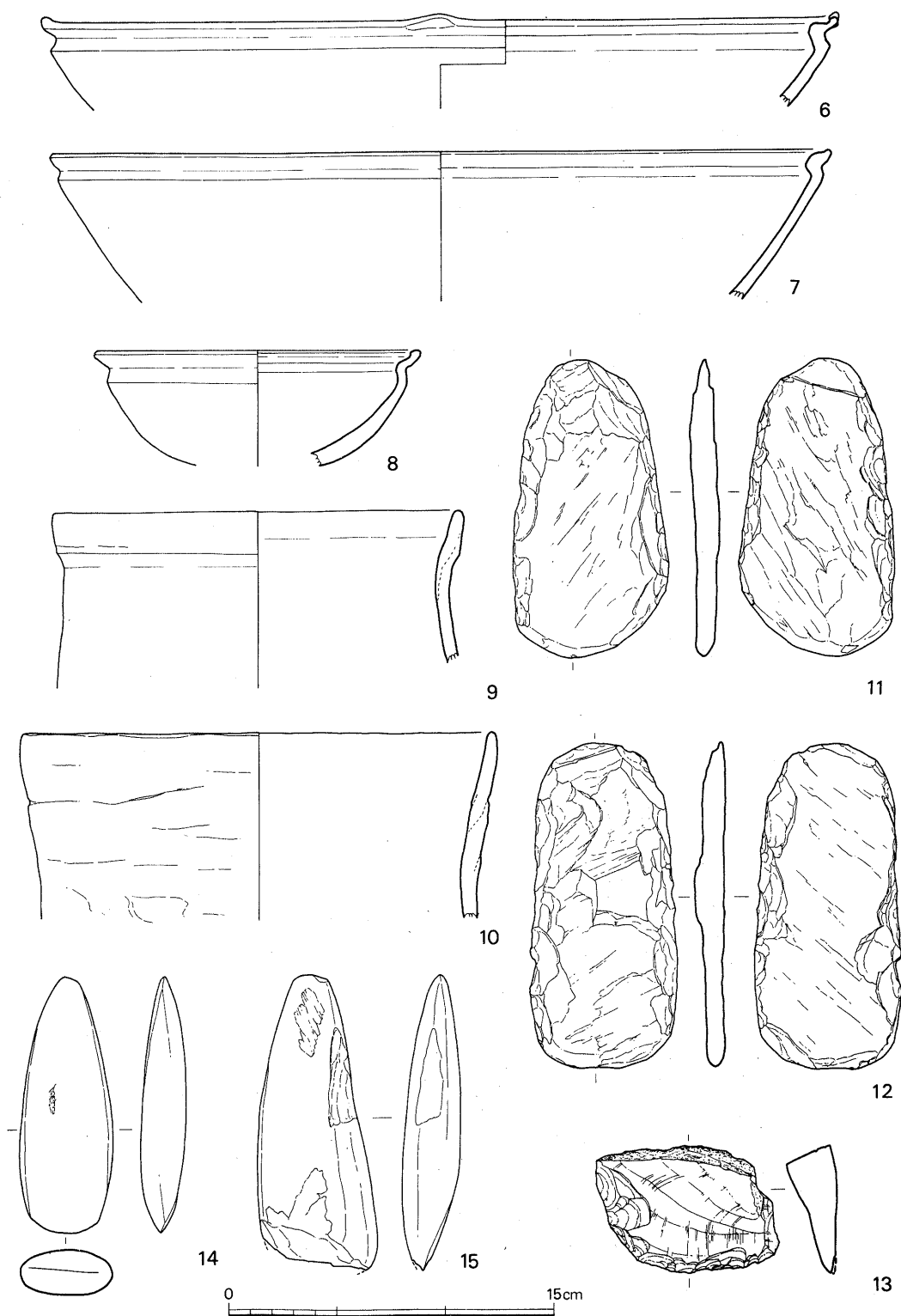
6～8は、口縁部、頸部共に短く屈折する浅鉢形土器で、口縁部内面に沈線をめぐらせた形状になっているが、7の例は消滅化している。8は碗に近いような小さなもので、外面には黒く塗られた痕跡がある。いずれも石英・雲母を含むが精良な胎土である。

9・10は内外面共にナデ調整される深鉢形土器で10は粗製。9は鈍く屈折する幅広な口縁部を有すが沈線等の文様はない。胎土には砂粒を多めに含む。

縄文土器のうち、1は、三万田式土器の範疇に含めうるが、2は御領式に近い。3～9はおおむね広田遺跡のⅢ・Ⅳ期に相当し、広田式土器及びそれに後出する土器である。当該遺跡出^{註(3)}



第20図 権現塚周辺遺跡出土遺物実測図① (1/3)

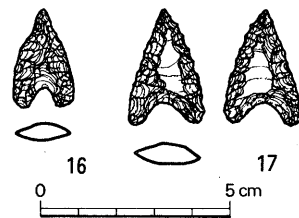


第21図 権現塚周辺遺跡出土遺物実測図② (1/3)

土土器は、筑後地区における縄文後期末～晩期前半の良好な資料といえる。今後充分な検討を加えて型式設定をしたい。

石器（第21・22図11～17）

石器類についても縄文土器同様ごく一部のものしか図示しえなかった。11～13は表採資料。14～17は26トレンチ出土資料である。全体的にみて扁平打製石斧・削器類が多く、石鏃は少ない。この他に石皿片・すり石等も出土している。



第22図 石器実測図(1/2)

11・12は、緑泥片岩製の扁平打製石斧で撥形を呈し、重量は179 g と201 g を測る。刃部は磨耗する。

14・15は蛇紋岩製の磨製石斧で、全面に研磨が及ぶ。細く尖がり気味の頭部から体部が膨らみ、やや扁刃になる刃部を有す。14は端正な形で156 g、15は一部欠損し242 g を有す。

13は、安山岩の横長剥片を利用した削器で、背側には自然面が残る。

16・17は黒曜石製の打製石鏃で、重量1.3 g・2.4 g を測る。16は全面に調整剥離が及ぶ。

これらの石器類は、おおむね土器の示す縄文後期末～晩期前半の間におさまると思われる。

石器類についても細部の検討は今後に期したい。

註(1) 鏡山猛 1957；筑後坂田の縄文土器、九州考古学2 福岡。

(2) 破片接合・復原等の遺物整理作業を未実施のため、整理作業の進行によって更に器形が明確になる資料もあると予想される。

(3) 小池史哲 1982；福岡県二丈町広田遺跡の縄文土器——晩期初頭広田式の設定——、森貞次郎博士古稀記念古文化論集、福岡。

圖 版



女山神籠石航空写真（白線は列石線
番号は水門跡）

1. 粥餅谷（横尾寺谷）
2. 長谷
3. 源吾谷
4. 産女谷



山内 1・2 号墳遠景（北から）



山内 1・2 号墳遠景（北から）



山内 1 号墳全景（東から）



山内 1 号墳全景（西から）



山内1号墳石室正面観



山内1号墳玄室奥壁



山内1号墳玄門（玄室より墓道をのぞむ）



山内1号墳左側壁



山内2号墳と神籠石列石（南東から）



山内2号墳全景（北西から）



山内2号墳羨道左側壁



墓道の土器出土状態



山内2号墳墓道と羨道



山内2号墳奥壁



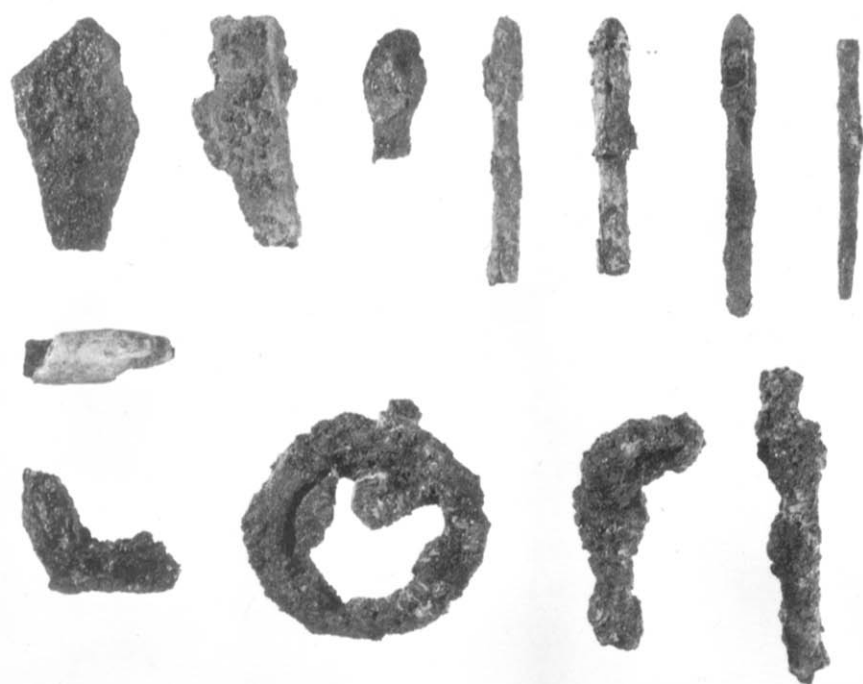
同上左側壁・玄門・羨門



山内 2 号墳玄門



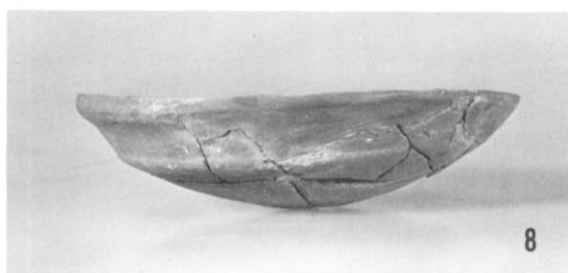
同上・石室内より筑後平野をのぞむ



山内1・2号墳出土武器・馬具類



山内2号墳出土装身具・馬具類



山内1号墳(8)・2号墳出土須恵器、土師器



26



27



28



30



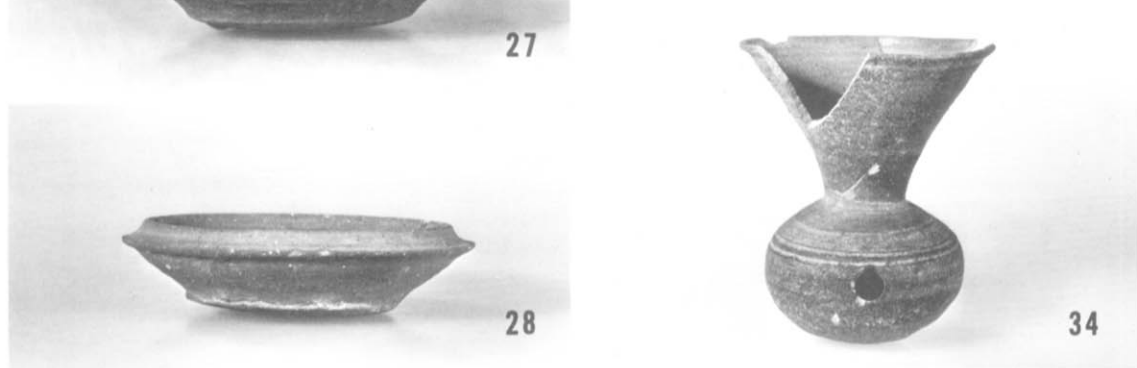
31



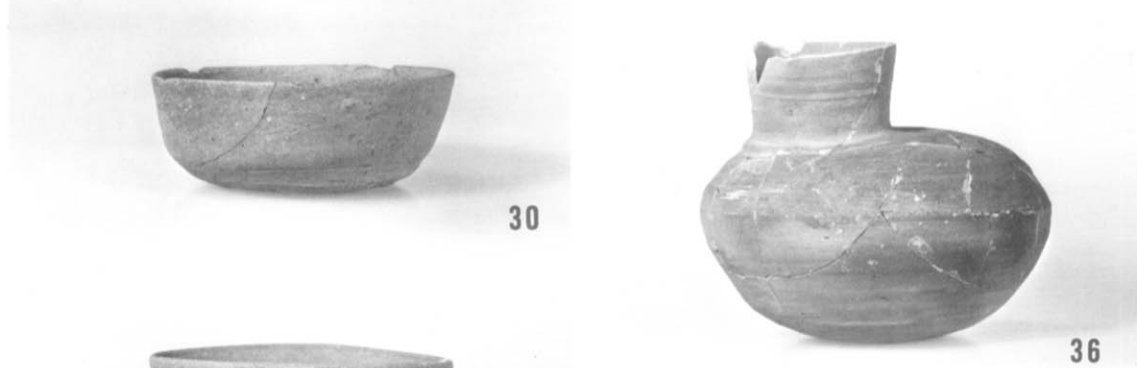
32



33



34



36



39



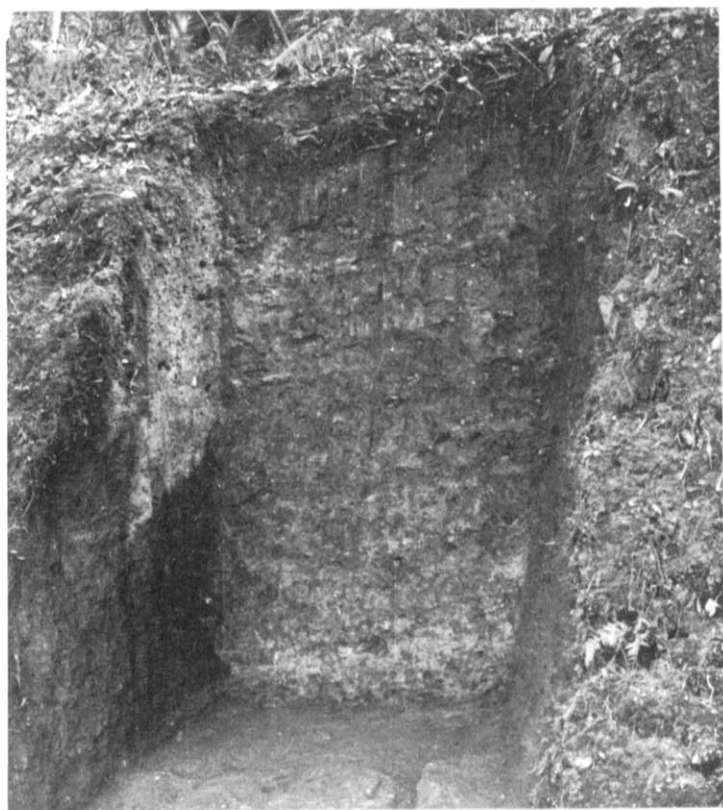
山内2号墳出土土師器



現地説明会に参加の人々



第2次Ⅱ-1地点 柱穴検出状態



第2次Ⅱ-1地点
土壘版築状態

第2次Ⅱ-2地点
列石と柱穴検出状態



第2次Ⅱ-2地点 柱穴検出状態



第3次調査地点遠景



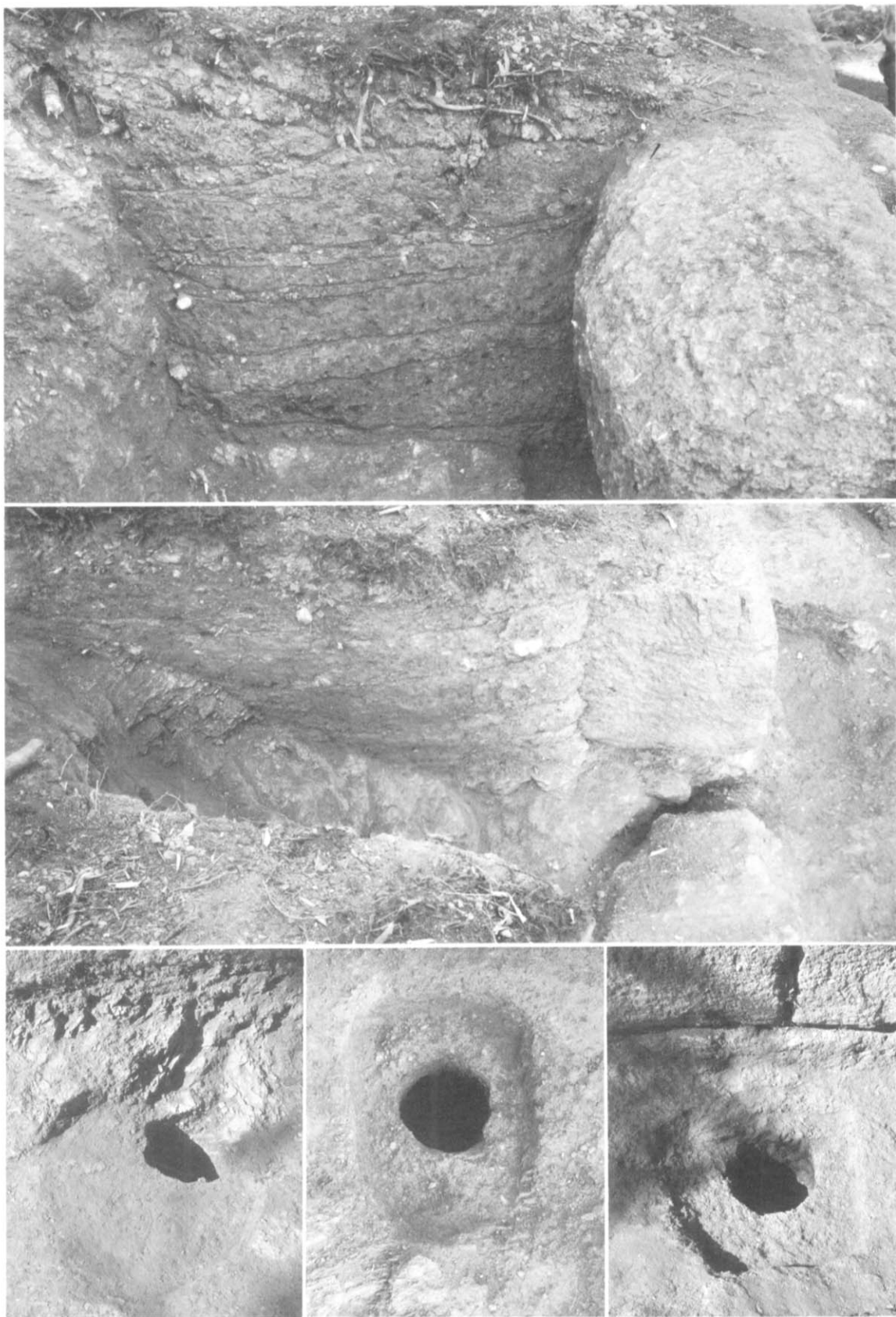
第3次調査地点産女谷水門付近の破壊状況



同 左



第4次列石前面の柱穴検出状態



第4次（上・中）列石背後の版築（下）列石前面の柱穴



産女谷水門の現状



粥餅谷（横尾寺谷）水門の現状



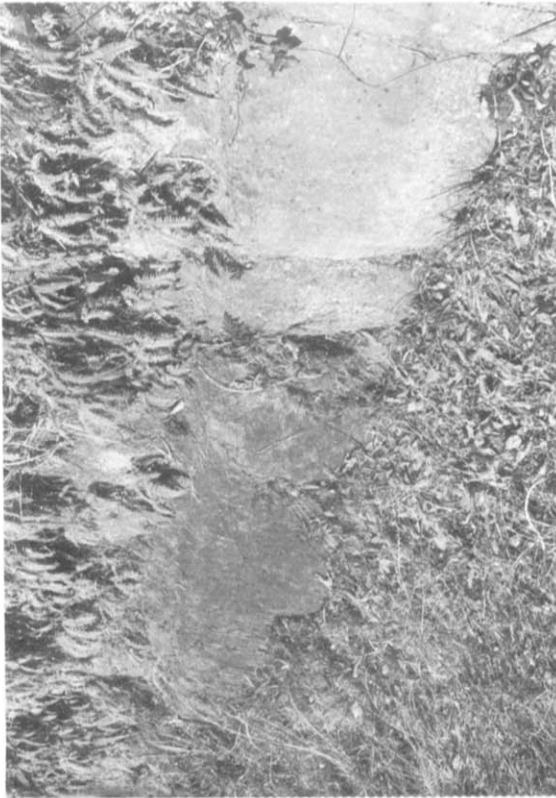
長谷水門の現状



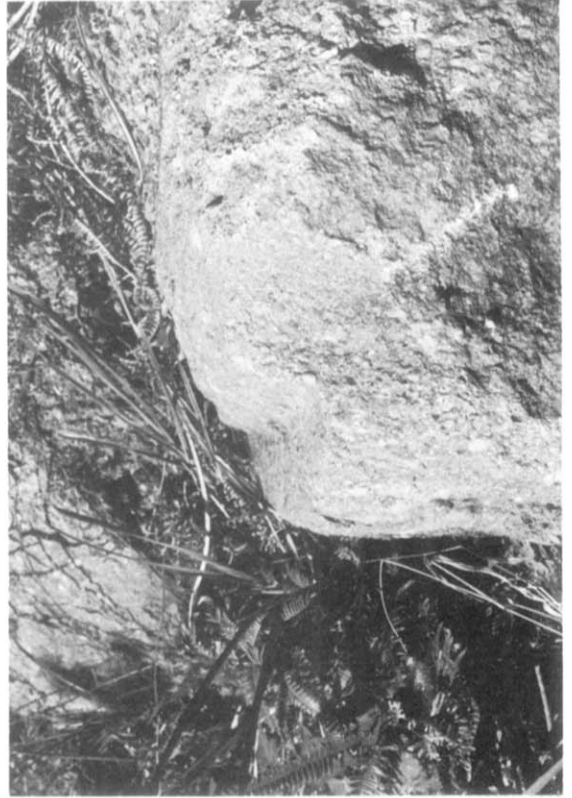
長谷水門の部分



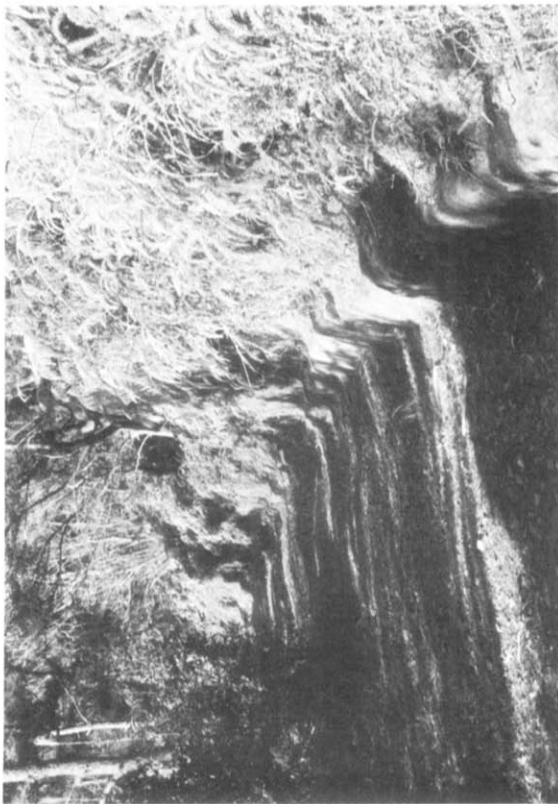
神籠石列石の現状



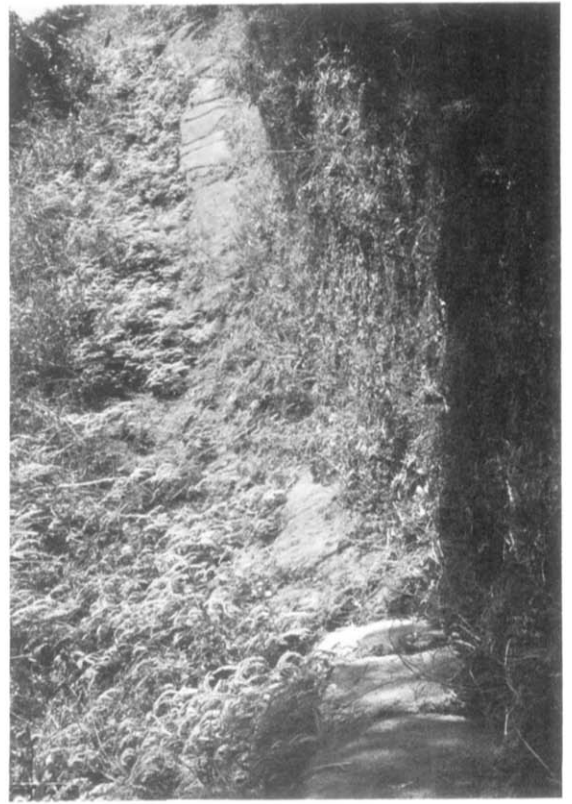
神籠石列石母岩削り出しの箇所



列石上面の段



神籠石列石の現状



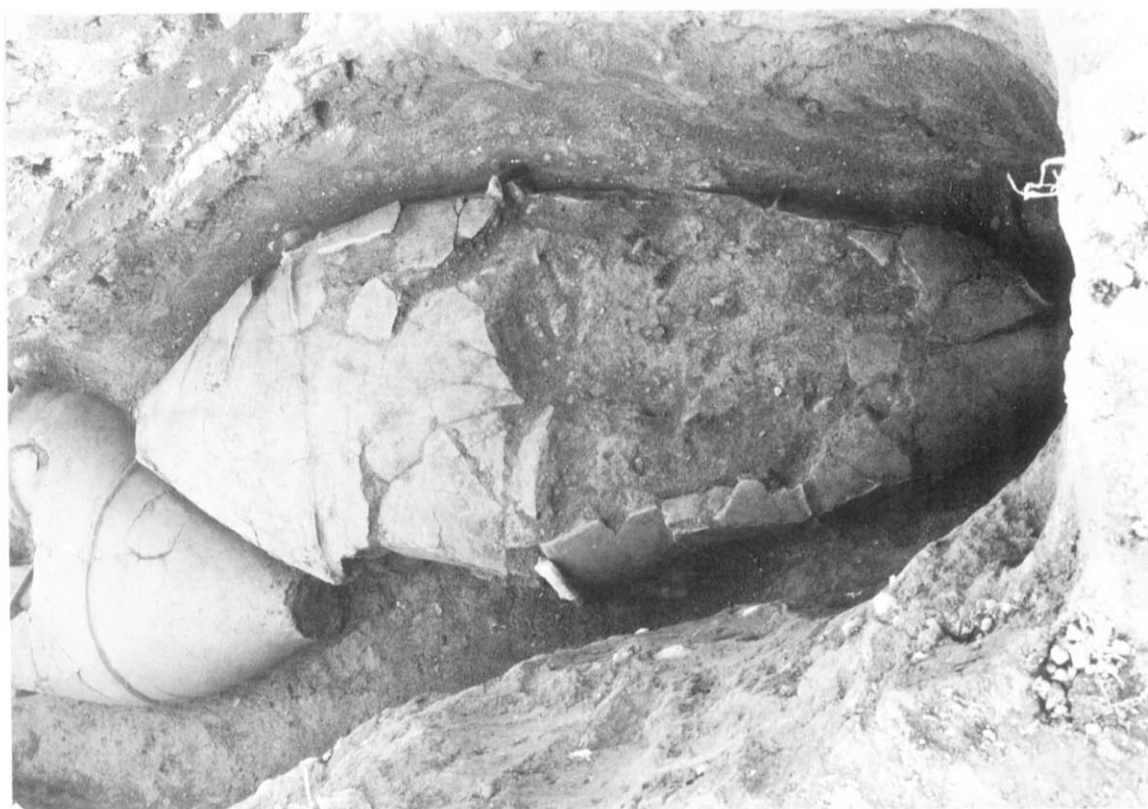
同上 (母岩削り出しの最も多き部分)



権現塚古墳全景（東から）



1号壺出土状態（西から）



2号壺出土状態（東から）



K1 上



K2 上



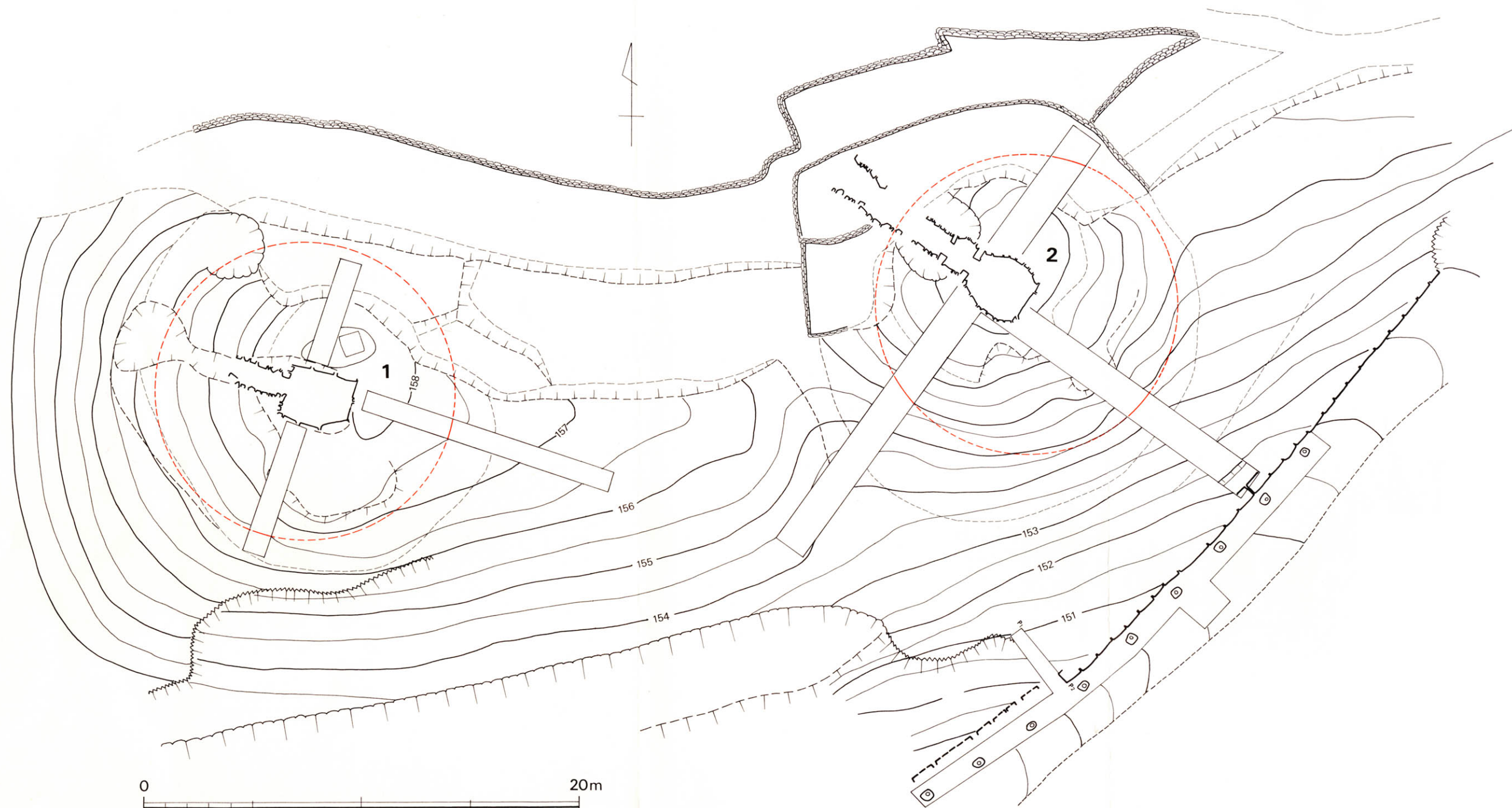
K1 下



K2 下

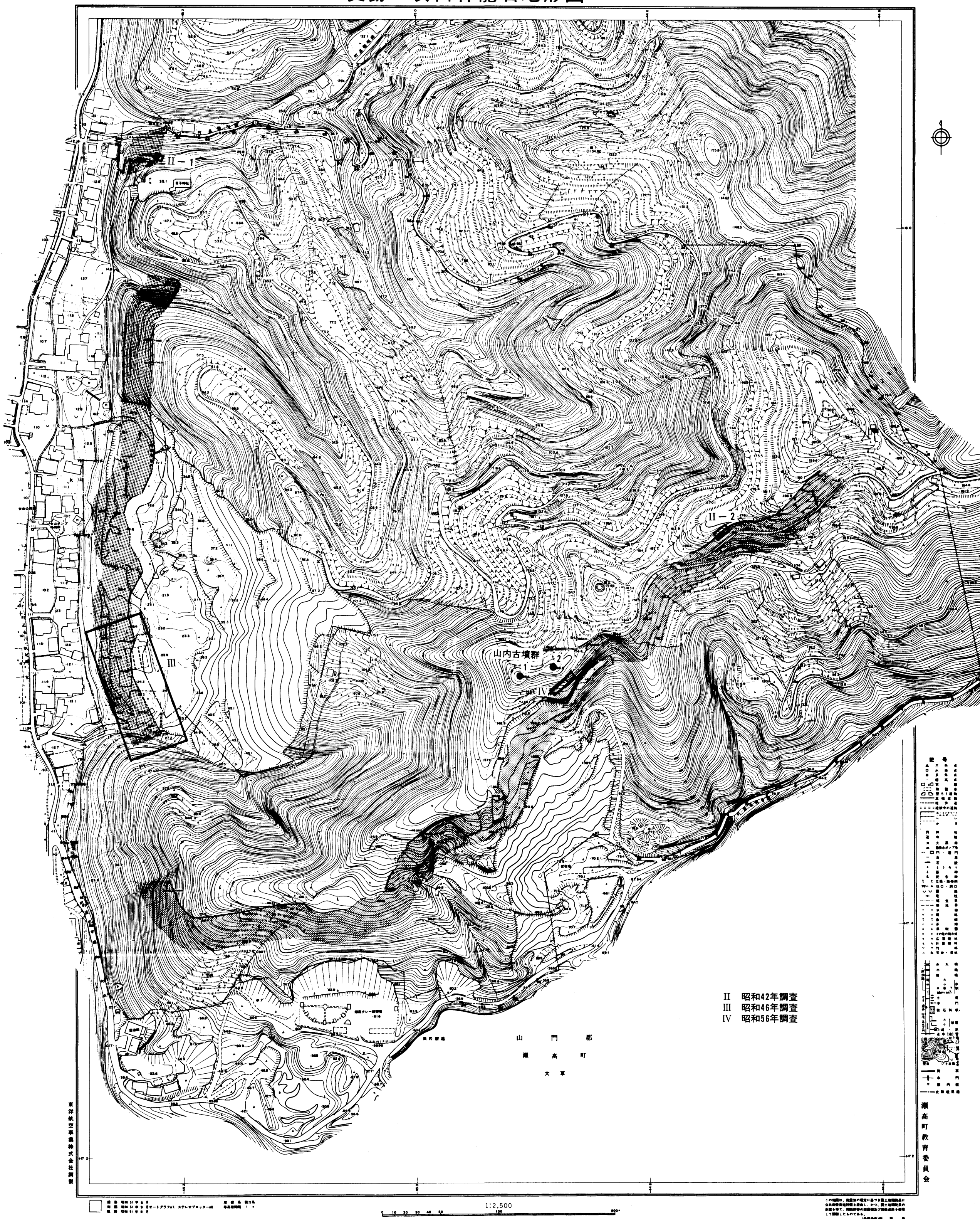


付図1 権現塚古墳地形測量図 (1/500)



付図2 山内1・2号墳地形測量図(1/200)

史跡 女山神籠石地形図



付図3 女山神籠石地形図 (1/2,500)



付図4 女山神籠石産女谷水門跡付近地形測量図〈第3次〉(1/200)

女山・山内古墳群

瀬高町文化財調査報告書

第 2 集

昭和 57 年 3 月 31 日

発行 瀬 高 町 教 育 委 員 会
山 門 郡 瀬 高 町 大 字 小 川 5

印刷 青 柳 工 業 株 式 会 社
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31